
胡蝶冀譚 想依儼輝

桜悪夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

胡蝶冀譚 想依儷輝

【Nコード】

N2435P

【作者名】

桜悪夢

【あらすじ】

物語は終端を迎えた。

外史の“鍵”は失われ 外史の“起点”は満ち

つた 外史の“語り手”は世界を導き消え去

しかし、その終端は始まりへと繋がる。

新たな外史へ。

プロローグ（前書き）

はじめまして m () m
桜悪夢と言います。

この作品は魏ルートENDから派生しています。

オリキャラも多少は出ると思いますが…
基本的には少ないです。

可能性な限り原作に添って紡いで行きたいかと。

また更新は不定期で遅いと断言しておきます。
御理解・御容赦下さい。

それでは

新たな扉を開きましょう。

ブローグ

夜の帳が天と地を抱き
深い静寂が支配する。

しかし、其処に在り感じるのは恐怖ではなく安寧。
孤独ではなく独占。

何気無い 他愛無い話。

それなのに、綴られる詩の様に輝いて感じる。

特に選んでいる訳でもない稚拙な言葉でさえ…
大切に思える。

悩み等、何もかもを忘れてしまいそうな程に心地好い雰囲気包む。

だからだろうか…

気が付けば夢中で喋り…

いつの間にか途絶えた隣の相槌が気になった。

焦燥と不安に心が騒ぐ。

視線を向けて見れば

俯いたまま、ジツ…と地を見詰めている。

一瞬の安堵の後、呆れた。

小さく溜め息を吐くと声を掛けてみる。

が、反応は無い。

再度、声を掛けるが…

それでも反応しない。

声量を上げ、名前を呼ぶ。

しかし、反応しない。

軽い苛立ちから声は自然と怒気を孕む。

呼ぶ、呼ぶ、呼ぶ

何度も、何度も、何度も、何度も

“彼”が“私”に

気付くまで

「……ず……か……と…… 一刀っ！」

「 え？」

本の少し何方らかが身体を傾ければ重なり合う距離で並んで座っているのに……

耳元で大声を出して漸く気付いた。

見開かれた黒い瞳に自分の顔が映っている。

「……………」

無言のまま、此方を向いた双眸を射抜く様な眼差しで見詰める。

けれど、締まりの無い顔は間抜けとしか言えず
芽生えた筈の怒りは簡単に萎えてしまう。

かと言って赦す様な笑顔は絶対に見せない。

自分の誇りが

いや、在り方が許さない。

「……え」と……」

気不味気に頭を掻きながら視線を他所へと逸らした。

大方、別の事を考えていて話は聞いていなかった…
そんな所だろう。

「私との話の最中に他の事を考えるなんて…
随分と良い度胸ね？」

「……………」

獲物を前にして舌舐め擦りする様な狡猾な笑みを浮かべて見せる。

臆した表情を見せるが…

それは一瞬の事。

その心は揺れていない。

彼の心を激しく揺らす事は実はかなり難しい。

「…………ごめん、華琳」

観念して素直に謝る。

そういう所が彼の美点でもあり、魅力の1つ。

「全く、貴男ときたら…」

呆れながらも触れ合う身体を離す事はしない。
寧ろ、その肩に頭を預けてしなだれ掛かった。

「それで？」

「…ちよつと、思い出してたんだ」

いつもの様に“お見通し”とばかりに訊ねた。

何処か物憂げな彼の視線に釣られて追うと

蒼黒の天の星の中に浮かぶ琥珀色に輝く月が在った。

琥珀の月

ただそれだけの事なのに、ズキツ…と胸が痛んだ。

「俺は何の為に“此処”に来たのか」

「何を言うかと思えばくだらない」

彼の言葉を遮る様に憎まれ口を叩く。

驚く彼の瞳が私を見詰めているが私は眼を瞑る。

「貴男にそんな余裕が有ると思っているの？」

戦が終わっても休む暇など私達にはないのよ？

寧ろ、これからが本番：

各街道の整備、開墾作業、治安維持の強化：

それに経済の発展にも力を入れない所だわ」

彼が反論が出来ない様に、矢継ぎ早にそれらしい理由を並べ立てる。

「…華琳は凄いな」

感心した様に彼は呟く。

「私を誰だと？」

余裕と風格の笑顔を浮かべ瞼を開き振り向く。
本心は決して見せない。

「魏の霸王 曹孟徳」

彼は両の眼を細めながら、穏やかに微笑む。

普段はちよつと頼りないが時折見せる強さと優しさ…
そして包容力。

鋭い様で鈍く…
初な様で大胆。

相反する側面が彼の魅力をより際立たせている。

「そう　　私は霸王」

ドクンッ…と胸が高鳴る。

此処が運命の選択だと
“私”は知っている。

「だから
（でも　　）」

けれど、食い違ふ声と心。

「私は何も…後悔しない」
（貴男に側に居てほしいの）

彼は寂し気な

それでいて穏やかな微笑みを浮かべる。

「ははっ…華琳らしいな」

そう “あの時” だって彼は笑っていた。

自らの行く末の判っている状況の中でさえ…
決して揺れ惑う事無く。

だから、気付けなかった。

失うまで…その大きさに。
その大切さに。

その儚さに

（違っっ！、違っのっ！）

取り戻したくて…
失いたくなくて…

ただただ、必死に求める。

けれど、心の叫びは届かず彼の温もりが離れてゆく。

同時に虚空へ落下していく様に“私”が遠ざかる。

（待つてっ！

もう少しだけ待つてっ！

お願いだからっ！）

彼と自分へ右手を伸ばし、必死に足掻く。

けれど、互いの距離はただ広がる一方。

どんどんと遠ざかる。

「愛してるよ、華琳…」

耳元で囁かれれば身も心も溶かされてしまう言葉。

けれど、それさえも今では幻の様に儚く響く。

そして聞きたくない一言が彼の口から零れる。

「さよなら
寂しがり屋の女の子
」

「
一刀っ！」

大きく見開かれた双眸。

宝石の様に美しい青い瞳は大粒の水滴を湛える。

視界はボヤけてはいるが…

此処が何処なのかは直ぐに判る。

見慣れた天井…

見慣れた天蓋…

自分の部屋に他ならない。

「……………またあの夢……………」

虚空に向け伸ばされていた右手を下ろし、目元を隠す様に視界を塞いだ。

右腕に感じるのは冷たさ。

頬を流れていても…

瞳から零れていても感じる事がなかったのに…

“涙”は溢れる。

求めるのは

冷たい涙ではなくて…

温かな涙。

照れ隠しに愛剣を振り翳し大声を上げる彼女

逃げながら“不条理だ！”と叫ぶ彼

その様子を見ながら辛辣な言葉を浴びせる彼女

止めるかどうか真剣に悩む妹分な彼女達

のんびりしている様で時折火種を放り込む彼女

彼の事を敬い慕いながらも離し立てる彼女達

彼と姉の姿を笑顔で見詰め楽しそうな彼女

酒瓶を手に笑いながら彼を激励する彼女

呆れながらも心地好さ気に微笑む彼女

そして

そんな“いつも”の光景を見詰めている私

馬鹿みたいに騒がしく…

当たり前のように皆の笑顔が溢れていて…

些細で、くだらない事さえ眩く輝いて見える…

彼の居た

彼と共に在った日々。

(……一刀……)

心の中で呟いただけで胸が締め付けられる。

痛み押し潰され、今にも泣き出してしまいそうだ。

“あの月夜”の様に全てを晒して泣き叫べば…
もしかしたら、本の少しは楽なのかも知れない。

けれど

「……泣くな、曹孟徳……」

私は自らを厳しく律する。

私は誓った。

彼が居た“証”を守ると。

私は誓った。

彼が居ない事を悔やむ様な世界を築き上げると。

私は誓った。

彼を愛する者達の

彼が愛する者達の

笑顔を絶やさないと。

(……………そう

だから、私は泣かない…

泣いてはいけない…)

彼は自らの“存在”を削り私に未来を託してくれた。

在るべき流れの道を外れ、この世界の未来は“未定”となった。

彼にも、誰にも解らない。

ならば、私が綴る。

“私の物語”の中へと彼が現れたのなら…

私は未来へと書き続ける。

彼が紡いだ様に

彼を忘れぬ様に

彼に繋がる様に

視界を塞ぐ右腕。

力無く、無造作に開かれたままたった掌。

私は意志を込めて強く握り締める。

そのまま右腕で涙を拭い、身体を起こした。

差し込む朝の光に誘われて窓へと眼を向ける。

まだ明けきっていない…

いつも変わらない朝。

「…習慣も考えものね」

苦笑しながら両手を付いて寝台から抜け出す。

僅かに軋んだ寝台から立ち上がると、寝間着の乱れを整えながら窓際へと歩く。

硝子越しの景色

まだ、靄の掛かったままの真っ白な世界が陽光を浴び徐々に色付く。

耳を澄ませば小鳥の囀りが聞こえてくる。

右手を伸ばし窓を開ければ部屋の中へと冷たい空気が流れ込む。
起き抜けの身体と意識には丁度良い刺激。

それを感じながら瞼を閉じ両手を頭上で組み、大きく伸びをする。

「……………んーっ……………」

自然と心身共に目覚める。

瞼を開けば視界に見慣れた景色が映る。

今日も私は生きている。

今日も私は此处に在る。

それを強く意識する。

「さて、今日も忙しくなりそうね」

そう呟いて空を見上げる。

まだ白さを纏う青。

見果てぬ“夢”を想い描き小さく微笑み

今日を迎える。

第一話 天へと謳え！

陳留

魏の首都であり霸王の城が在る街は今、賑わいを見せ其処彼処で人々が動き回る姿を見る事が出来た。

笑顔と活気が満ち溢れる。

願い、求めた平和だ。

「…ねえ、見えてる？…」

天に向かい、ぽつりと呟くその言葉。

それは誰の耳にも届かずに喧騒に飲まれる。

そう、届く筈がない。

届けたい相手は

もう傍に居ないのだから…

(…………駄目ね…………)

判つていても、油断すると直ぐに“蓋”が緩む。

小さく苦笑し視線を戻すと通りを元気に走る子供達を見付け眼を細める。

こんな光景を見るも随分と久し振りの気がする。

大陸統一、三国同盟の発足から早半年

直後は“戦の事後処理”に追われて書簡や竹簡を睨む日々が続いた。

城の外へ出るのは二ヶ月に一度開かれる三国会場のみという生活をしていた。

覇権を争い戦場を駆け巡る日々が懐かしくさえ感じる程に忙しくけれども、漸く掴み取った“平和”への“始まり”を放棄する様な真似は絶対に許されない。

否　私が許さない。

ただそれは“覇王”としてではない。

あの乱世を戦い生き抜いた者として…
あの乱世の表も裏も知る者だからこそ…
現在に在る平和を守らなくてはならない

「此方でしたか、華琳様」

不意に呼ばれ、思考を中断して現実へと戻る。

真名を呼ぶ聞き慣れた声。

直ぐに誰だか判る。

「秋蘭、何か有ったの？」

賑わう人々を見詰めたまま振り向かずには訊く。

「先程、呉蜀から先触れが到着しました
後二刻程で到着の予定と」

「そう…準備の方は？」

「滞り無く」

それを聞いて安心する。

主催する側が遅れていては招待者に失礼だ。

何より、相手は同盟国。

同盟発足後、三国会議以外の場に初めて集まる。
同時に初めて三国の主力が一堂に会する。

無様な姿は見せられない。

「秋蘭、人手は足りてる？」

必要なら一時的に警備から回して構わないわよ？」

「其方らは大丈夫かと…」

予定よりも作業は順調で、宴の会場の方も準備は概ね完成しております」

いつも通りの声色と口調で答える秋蘭。

だが、無意識にだろう。

本音が溢れていた。

（“其方らは”…ね）

やはり問題が有るとすれば私達なのだろう。

街並みから青空へと視線を移して見上げた。

三国同盟発足と戦争終結の祝宴を兼ねた大祭。

それは

“天遣想祈祭”と銘打った“彼”への感謝祭。

私達は勿論

武官・文官や兵士、魏の民全てが彼を敬愛している。

魏の霸王も、呉の小霸王も蜀の大徳でさえも…

彼の代わりは出来ない。

失って初めて知った。

彼の存在の大きさを。

覇を実現した筈の曹魏。

けれど、終戦の後に有ったのは深い悲しみ。

戦であれば命は失われる。

敵味方問わず、多くの兵が命を散らした。

それでも、此処だけは…

彼が居た魏だけは…

あの乱世の中でさえ笑顔が絶えずに在った。

霸王や小霸王の様に武勇で安寧を齎す訳ではなく…

大徳の様に理想という甘い蜜を与えるでもなく…

ただ、全てと向き合う。

悲しむ者が有れば、理由を聞き共に泣き…

苦しむ者が有れば、理由を聞き共に苦労し…

手を差し伸べ、共に立つ。

“優しさ”という名の毒を与え、頼り縋り喚くだけの何もしない愚かな者を生む様な真似はしない。

人として在るが俤に…

彼は全てと向き合った。

だから皆、彼に惹かれたのだろう。

常に相手の事を第一に思い考えて行動する。

悲哀も、憤怒も、苦痛も、憎悪も、全て…

彼は笑顔へと導いた。

一人一人が、自らの笑顔で生きていられる様に。

いつの間にか彼は魏の支柱になっていた。

だから、彼の“帰郷”には皆が涙した。

けれど、彼は魏の支柱。

悲しみに頭を垂れて踞り、立ち止まっていた皆に顔を上げさせ、進ませる。

彼が蒔いた“種”は涙雨を糧にして芽吹く。

何度踏まれても腐る事無く真っ直ぐに育つ強さを持ち笑顔という花を咲かせる。

魏に於いて彼はただの御輿ではない。

今の魏の“父”と呼べる。

そして、彼が父ならば…

私達 私は“母”として“子”を育もう。

彼の遺した“未来”という大切な子を。

その為に

悲しみは胸の奥底に仕舞い蓋をする。

喻え忠臣達から恨まれ様と見限られ様とも構わない。

厳しく律し、激を飛ばす。

彼が嘆き悲しまない様に。

それが私の役目と信じて。

一ヶ月もすれば他の娘達も覚悟が出来た。

彼は守り、築き、託した。
それを裏切らない為に。

悲しみに暮れた時間を取り戻す様に働いた。

城の者も、兵も、民も…
皆が“未来”へと進む。

彼の居た“証”

魏に咲き誇る花を大陸へと咲き広げる為に。

我等の志は一つとなった。

けれど、心の傷痕は癒えず今も尚膿み続ける。

私達の中で

「秋蘭、急ぎの用は？」

私は秋蘭へと振り向く。

「特には」

「そう、なら私は少し散歩でもしてくるわ
貴女達も最終確認と指示を出したら“準備”なさい」

「はっ…」

秋蘭は言葉の意味を即座に理解して答える。

「春蘭と桂花には私の事は探さない様にと」

「御意」

あの娘達の行動を読み先に手を打って置く。
邪魔をされては私も困る。

秋蘭に指示を出して人混みの中へと私は消える。

華琳様の背中を見送る。

「…準備、か…」

先程まで華琳様が見上げていた空を見詰める。

やはり、自分では隠してるつもりでも気付かない内に“蓋”が緩んでいた様だ。

(……………なあ、一刀…)

私達は　私はどうすれば良いのだろうか？)

静かに胸の中で訊く。

が、答えは返らない。

(華琳様も姉者も皆も…)

私もお前に会いたい)

気を抜けば涙となって溢れ出てしまっただろう。

しかし、私は泣いてしまっ訳にはいかない。

華琳様から彼が消えた事を聞かされた夜

私達は泣き崩れた。

どうして？

どうしてだ？

戦いが終わり、これからが本当にお前の存在が必要になってくるのに…

お前は言っただけではないか…

終戦後にこそ治安と平和を維持する備えが要ると…
その為の警備隊だと…

なのに何故、私達の前から去ってしまうのだ…

どうしてだ…一刀

私は姉者に縋り付いて泣き叫んでいた。

霞も、風も、凧も、稟も、真桜も、沙和も、季衣も、流琉も、桂花
でさえも…

ただただ、泣いていた。

泣いていなかったのは…
華琳様と 姉者。

姉者は泣かなかった。

泣く私達を胸に抱き締め、静かに背中を、頭を撫でてくれていた。

暫くして、私達の泣き声が小さくなった時…

皆に声を掛けたのは華琳様ではなく姉者だった。

「聞け、魏の忠臣達よっ！

泣きたければ泣けっ！

だが、下を向くなっ！

歩みを止めるなっ！

我等には成さねばならない事が有るのを忘れるなっ！

死んでいった者達の為にも掴み取った平和を守り繋ぐ責任が有るっ！

もう二度と、同じ悲しみが繰り返されぬ為にっ！

繰り返させぬ為にっ！

我等は折れてはならんっ！

我等だけが

一刀の志を継ぎ叶えられる事を心せよっ！」

姉者の言葉に皆が
華琳様でさえ眼を見開く。

言葉と共に叩き付けられる闘気が意識を揺らす。

嫌でも言葉の意味を理解し胸の奥に熱い炎が灯る。

「春蘭の言う通りよ」

華琳様が姉者に続く。

「一刀は最後の一瞬まで、私達を信じ想っていた…
いえ、今もそうでしょう

それは誰よりも私達自身が知っている

ならば、我等が成すべきは一刀の志を絶やさぬ事…」

華琳様は言葉を切り私達をゆっくりと見回される。

華琳様は“絶”を手にし、右腕を掲げられた。

「誓え、己が心につ！

悲しみは直ぐには癒えないだろう…

だが、決して折れぬとっ！

誓え、己が想いにつ！

愛する者が信じ託した未来を守り育む事をつ！

此処に私は誓おうっ！

一刀が居ない事を悔やむ様な未来にするとっ！」

華琳様の宣言に胸が高鳴るのを抑えられない。

「私は誓おうっ！

我が大剣は我が主の為…

そして一刀の託した平和を守る為、あらゆる敵を討ち倒さんとっ！」

姉者が“七星餓狼”を掲げ華琳様の“絶”に重ねる。

それで十分だった。

一人、また一人と…

誓いを立てる。

そして

『我等は此処に誓うっ！

北郷一刀の灯した“光”を消して絶やさぬ事をつ！』

十二人の乙女は誓う。

“天の御遣い”ではなく、“愛する人”北郷一刀に。

だが、簡単には拭いきれず全員が立ち直るには一ヶ月もの時を要した。

私はあの夜に立ち直った。

しかし、本当の意味で心を決めたのは二週間後の夜。

その日の昼間

急ぎの仕事から姉者を探し一人で森に行つたと聞いて向かった。

姉者にしては珍しいなとは道中で思った。

姉者を探しに森へ入って…

私は見てしまった。

大樹の幹を叩きながら泣く姉者の姿を。

一刀の名を呼びながら泣きじゃくる姉者。

堪らず私の方も涙が溢れ、私は姉者に声を掛けられず引き返した。

その後、森の出口付近にて平静を装い声を掛けた。

姉者が賊の討伐に出た為、久し振りに一人きりの夜を迎えていた。

気分転換も兼ねて片付けをしていた時だった。

それを見付けたのは。

姉者にしては珍しい…

洒落た布袋を態々用意して大切に仕舞われた竹簡。

“春蘭へ”

其処に書かれていた文字を見忘れる事はない。
見間違う事もない。

それは一刀の筆跡だった。

私は自分を抑えられず中を見てしまった。

其処に書かれていたのは…

あの日の姉者の言葉

そして、一刀からの最初で最後の願いだった。

『春蘭へ

これを読んでる頃には俺は消えていると思う
杞憂で済めば笑い話だけど嫌な予感はある物…
だから、頼みが有る

本当なら華琳がすべき事と思うけど…

多分、無理だと思う

だからさ、春蘭が代わりに支えてあげて欲しい

俺は皆に笑顔で居て欲しいけど何も出来ない

最後に遺せるのは

皆への激励の言葉だけ

損な役回りだけど…

頼めるのは春蘭しか居ない

俺の代わりに、華琳と皆を支えてあげて欲しい

最初で最後の“お願い”がこんなだけ…

俺らしいかな？、なんてな

追伸

喻え、世界から俺の存在が消えたとしても…

俺の中には皆と共に歩み、過ごした日々は刻まれている

何一つ絶対に忘れない

誰にも奪わせない

俺が消えても消させない

いつまでも皆を愛してる

いつまでも君を愛してる

我が愛しき人 春蘭へ

北郷 一刀

竹簡を持つ手が震える。

姉者だけが手紙を貰った事に嫉妬して？

姉者だけが一刀に信じられている事が悔しくて？

姉者だけが特別に愛されている様な気がして？

否 何れも否だ。

「…私は馬鹿だ…
大馬鹿者だっ！」

思わず大声が出る。

だが、周りを気にする余裕はなかった。

「姉者にとっては華琳様が一番だから大丈夫？

何を勝手な事を…

姉者の事だから判ってる？

何も判っていないかったのは私の方ではないか…」

あの時の姉者は

泣かなかったのではない…

泣けなかったのだ。

一刀から皆の事を託され、支えなければならぬ。
だから、姉者だけ泣く事が出来なかった。

それが、何れ程辛い…

皆と一緒に泣ければ何れ程楽だったか…

想像するだけでも苦しい。

現実には 想像の比ではないだろう。

そして、あの時の言葉…

その最後を見て気付く。

我等だけが

一刀の志を継ぎ叶えられる事を心せよっ！

そんな言葉は

何処にも書かれていない。

あれは

私達の 私心を衝いたあの一言だけは

紛れもなく

夏侯元讓の言葉。

よく見れば竹簡には水滴が滲んだ跡が有る。

恐らくは集まる前に一人で泣いたのかもしれない。

挫折そうになった時

一人で読み返して泣いたのかもしれない。

「……………そうか、姉者…
ならば私も共に行こう」

その夜

夏侯妙才は心を決めた。

記憶の中から現実へと戻り喧騒に包まれる。

（誓い、そして歩む…

だが、言う程簡単ではないのだがな…）

こんな時、彼ならどうするだろうか…

何と無く考えてみる。

“ん…そうだなあ…

悩んでも仕方無いのなら成るように任せるよ
で、自分が後悔しない様に自分のしたい様にするさ”

そう言っただけで笑っている彼が脳裏を過った。

そんな会話をした覚えなど無かったが…
何故か確信出来る。

「……ふっ、そうだな…」

小さく笑みを浮かべ秋蘭はその場を後にした。

華琳様を探しに行つた筈の秋蘭から指示を受けた。

「準備つて言われても…

何をすれば良いのよ？

おまけに…

華琳様を探すなつて何？

私に対する嫌がらせ？」

愚痴る様に呟きながらも、足は自然と其処へと向かい歩いていた。

扉の前で深呼吸し…

扉を静かに開ける。

主を失つた筈の部屋。

なのに、其処には“彼”の匂いと痕跡が残る。

「……………」

特定の者以外は入る事さえ禁じられている。

可能性な限り、彼の痕跡を皆が遺したいのだ。

「……………奇妙な物ね…」

痕跡を遺す

しかし、放置すれば空気は汚れ黴が生えるだろうし…
異臭も漂う可能性が有る。

だから、定期的に窓を開け風を通して換気する。

布団や衣服も洗い干す。

勿論、掃除もしている。

主な担当は秋蘭と流琉。

時折、風や稟…

それに私も手伝う。

あれから半年も経つのに…

この部屋だけは時の流れが止まっている様に思う。

どれだけ換気しても…

どれだけ洗濯しても…

彼の匂いが失われる事など一度も無かった。

「……………全く、これだから全身白濁液男は…」

匂いを残す位なら消えたりなんかしないで欲しいわ」

そう言いながら、私は彼の使っていた寝台へ座る。

ぽふっ…と倒れてみれば、彼の匂いが鼻孔を撥る。

「……何で消えたのよ…」

問い詰める様に呟きながらゆっくりと瞼を閉じる。

いつからだろうか？

あんなに嫌いな男なのに…
華琳様に近寄る蟲なのに…

私は彼の事を

好きになっていた。

最初に会った時は華琳様の真名を呼ぶ命知らずな馬鹿だと思った。

けれど、彼は私よりも後に来たのに…

私より先に華琳様に真名を預けられていた。

その事に嫉妬心が無かったとは言わない。

だがもしも、私の方が先に華琳様から真名を預かっていたとしたら…

「……………変わらないわね」

寧ろ、より嫌っていたか。

けれど

“好きにならない自分”を想像する事が出来ない。

それ程までに私の中で彼が大きな存在になっている。

薄々は気付いていた。

何だかんだと言いながらも彼と肌を重ねている時…

私は自分が“女”だと感じ素直に喜びを覚えた。

多分 春蘭や秋蘭、稟も同じではないだろうか。

自覚したのは あの夜。

華琳様の口から“消えた”と聞いた時だ。

啞然とする一同。

華琳様が再度告げると皆が泣き、喚き、嘆いた。

そんな中

私は口角を上げた。

「くくっ…」

漸く私の目の前から消えてくれたのね

くくくっ、あははははっ！

これで華琳様が穢される事もないわっ！

あのド変態鬼畜全身孕ませ種馬変態男の顔を見なくて済むなんて
まるで夢の様だわっ！！！！」

私は此処ぞとばかりに声を上げて嘲笑し罵倒する。

だが、いつもなら風辺りが反論しそうなのに何の声も返って来ない。

場の空気を読み？

だから、言ってるのよ。

あんな変態の所為で折角の祝勝気分が台無しよ。

無理矢理にでも変えないと不味いじゃないの。

じゃないと

じゃないと？

「桂花」

不意に春蘭が私を呼ぶ。

秋蘭を、季衣を、流琉を…その腕の中に抱き締めて。

私を静かに見詰めている。

「な、何よ？」

私は何故か動揺した。

そして、腕を引かれる様に春蘭の元へ足が進む。

“何故？”という疑問すら頭に浮かんで来ない。

「我慢するな」

「っ！」

その瞬間、私は理解した。

認めたくはない。

けれど、認めてしまう。

私は
北郷一刀を愛していると。

「う　　うわあああああああ——っ！——！！」

堰を切った様に感情が溢れ出した。

私の頭の中は唯一人の事で塗り潰される。

「なんでよっ！？」

勝手に人の中に入り込んで来たくせに、なんで勝手に居なくなるのよっ！？

馬鹿　　馬鹿ああっ！！！！」

私は他の三人と共に春蘭の腕の中で泣き叫んだ。

「……………くっ、私とした事があんな失態を晒すなんて」

今思い出しても悔しい。

後で真桜達から聞いたが、私は嘲笑し、罵倒しながら泣いていたら

しい。

なんて無様な姿だろう。

「…全部アンタの所為よ」

此処には居ない部屋の主を恨み呪う様に呟く。

私は悔しかった。

泣いた事よりも

自分の全てだと思っていた華琳様の事さえ忘れ…
唯一人の男の為に心を痛め泣き叫んだ事が。

華琳様ではなく

彼が私の全てを塗り替えて私を泣かせた事が。

そして

気付くのが遅すぎた事が。

だから、願う

「…早く帰ってきて責任、取りなさいよね…」

その呟きは優しく、儚く、寂し気に空気に融けた。

「はあああーっ！」

「せええええいつ！」

ガギンツ！、と鈍い金属音が練習場で響く。

撃ち合うは“七星餓狼”と“飛龍偃月刀”

「甘いぞ霞っ！」

「春蘭こそ温いでっ！」

春蘭と霞が…割り和本気で手合わせしていた。

「ならば

これはどうだーっ！」

春蘭は鐔迫り合いを押して右足に体重を乗せて身体を捻り左から真横に薙ぐ。

霞は柄を立てて受け
勢いを殺さず利用し偃月刀を半回転させる。

「おおっ！？」

受け止めるだろうと思っていた春蘭は体勢を崩す。

霞は更に半回転させ切っ先を春蘭に突き付ける。

だが

春蘭も負けてはいない。

体勢を崩されながら剣先を地面に突き立て前のめりになりつつ勢いのまま左足で地面を蹴った。

「なあっ！？」

ブオンッ！、と風を斬って春蘭の右足が無防備な霞の顔を掠めた。

霞が咄嗟に上体を左後ろへ反らしていなければ完璧に顎を捕えていただろう。

春蘭は剣を軸に一回転して着地と同時に身体を沈めて一気に駆ける。

霞は横に一回転しながら、偃月刀を振り抜く。

ガギンッ！、と両の刃が搗ち合うが
春蘭は止まらない。

霞の攻撃を往なしながら、偃月刀に刃を沿わして更に深く踏み込む。

勝負の分かれ目。

押し切れば霞の勝ち。
踏み凌げば春蘭の勝ち。

勝負の行方は

ギャギンッ！

七星餓狼が宙を舞った。

回転してザンッ！と地面に突き刺さる。

『……………』

静かに互いを見据え

両者は同時に口元に笑みを浮かべた。

偃月刀の柄は春蘭の左肩口の上で止まり

春蘭の手刀　突きは霞の喉元で止まっている。

「…引き分けか」

「…引き分けやね」

“やれやれ…”と肩を竦め二人は衣服に着いた土埃を払い落とす。

「…春蘭はええの？」

剣を抜いている春蘭に霞は訊ねる。

「…そう言っお前こそどうなのだ？」

春蘭は“何が”とは訊かず逆に訊き返す。

「ウチか？、ウチは…」

まあ、大丈夫やろ」

「いい加減だな…」

「いやいや、春蘭にだけは言われとうないで」

「何だとおっ!?!」

暫し、いつも通りの慣れた遣り取りをする。

練習場を後にし

二人は城壁の上に立つ。

遙かな地平を並んで見詰め風を感じる。

「……ウチな、約束した

いつか二人で羅馬に行くて約束したんよ」

霞は静かに呟く。

「…私も約束したな

戦が終わっても私達の元を離れない、と…」

春蘭も静かに呟く。

城内と街の喧騒は二人には届いていない。

今はただ、互いの声だけが耳に届くのみ。

あの夜

霞は泣いた。

華琳の言葉を聞き泣いた。

頭の中も、心の中も…
ぐちゃぐちゃになった。

判るのは悲しいという事。
ただ、それだけ。

春蘭の言葉が
華琳の言葉が

見失っていた自分の想いを思い出させてくれた。

もしも、二人が居なければ納得が出来ずに飛び出して一刀を探し回
っただろう。

そして、野垂れ死んでいたかもしれない。

多分

凧や真桜、沙和も同じ様な状況に有っただろう。

それ程までに一刀の存在は大きいのだから。

けど、今は違う。

泣いてても何も変わらないのなら
自分の意志で変えて行けばいいだけの話。

次に泣くのは
再会の嬉し泣きと決めた。

あの日

春蘭は料理で汚れた衣服を着替えに自室に戻った。

其処で竹簡を見付けた。
中を見て驚く。

一瞬、華琳様に報告しようかとは思ったが…
それは止めた。

悪戯でこんな真似はしない事を知っている。

ならば、私の答え一つ。

一刀の想いに
その願いに応えるだけ。

蜀の侍女が華琳様の召集を伝えに来るまで必死に読み台詞を覚え様としたが…

頭に入らなかった。

だが、召集を聞いた途端に全てが頭に入った。

それは多分、私が信じたくなかったからだろう。

そして 覚悟が決めれば心は静かになった。

華琳様の表情を見て一刀が私に頼んだ理由が判った。

恐らく

いや、間違い無く華琳様は泣いていたのだろう。

いつもの私なら気付く事もなかっただろう。

だが、今は判ってしまう。

そして、華琳様から一刀が消えた事を訊き
皆が心を痛めている事も。

秋蘭や稟、桂花まで自分を見失い泣きじゃくる。

まるで子供の様に。

ふと目を向ければ華琳様は俯いたままだった。

だが、その手は強く握られ身体が小さく震えている。

霸王の姿は其処には無い。

在るのは

“華琳”という名の一人の少女の姿だった。

一刀は

一刀だけが判っていた。

彼女は自分の“弱さ”など誰にも見せない。

だが、本当は違う。

彼女は見せ方を

“甘え方”を知らない。

だから、この“役目”には私しか居ない。

他の誰にも務まらない。

皆が落ち着くのを待ち…

私は一世一代の“演技”の幕を上げた。

悲しくないと言えは嘘だ。
私は必死に自分を騙した。

この夜だけは
私は泣いてはいけない。

そう心に誓って。

その後

反動、とでも言うのか…

今でも時折、どうしても無く涙が溢れる事がある。

ただ

あの時の心の静かさは…

私を少しだけ成長させた。

次に一刀に会う時は

秋蘭の様に落ち着いた私を見せてやろうと思う。

春蘭と霞は互いへ顔を向け穏やかに微笑む。

心は静かに

けれど、熱い炎を宿す。

そして、霸王が見せる様な悪戯な笑みを浮かべた。

「約束は守らせんな」

「ああ、守らせないと」

二人は蒼天を見上げ
刃を重ねて掲げる。

「覚悟しときい…」

女を待たすと高う付くで」

「しっかりと償え…」

我等の流した涙の代価を」

まるで、罪状でも読む様に静かな声で言い

『その人生を賭してっ！』

二人は声も高らかに叫ぶ。

それは宛ら

天と神に対する宣戦布告。

そう

彼女達の戦いはまだ

終わっていない。

第二話 星の導き手

陳留近くの森

鬱蒼と茂る木々の回廊。

森を抜ける山道ではなく、少し入り組んだ山道を抜け僅かに外れると

其処に出る。

側を小川が流れ、少しだけ淵の様になった場所。

水深は膝上程度なので夏は水遊びにも向いている。

だが、今は冬。

時期的には厳しい。

特に草花等が群生している訳でもなく…

絶景が拝めるでもなく…

極めて平凡な場所。

最初は暇潰しの散歩で偶然見付けただけ。

けれど、今は特別な場所。

私と彼が

初めて結ばれた場所。

他の者も場所は知っているけれど理由は知らない。

大切な思い出の場所

そう言えば、余計な追究は誰もしなかった。

水辺に立ち

ふと近くの岩に目を遣る。

この岩にも思い出が有る。

「初めて連れて来た時は…」

春蘭を出しにしたわね」

“春蘭の着替えを覗いた”事への罰と称し、この岩の上から川の中へ向けて突き落としてやった。

話を聞いた時、頭の中では策が組み上げ始められた。

まあ、その所為で報告会の最中に妄想に浸ってしまう失態をしてしまったが…

(…今思うと稟みたいね)

ちょっと複雑な気分だ。

ずぶ濡れになれば逆上して襲い掛かるか…
或いは窘めてくるか…

結果は後者だった。

だが、まだ策は有った。
濡れて張り付いた衣服とか見える身体の曲線に欲情し襲い掛かる

“魏の種馬”と呼ばれる位だから、簡単に“誘い”に乗ると踏んでいた。

なのに

「……あの時は私の先見も甘かったわ…」

彼は照れて動揺していた。

けれど、一言で立場が逆になってしまふ。

私の方が羞恥に負けた。

つい、私は外方を向いた。

“薪を拾ってくる”と言い離れた隙に策を練り直す。

搦め手が通じないなら…

正面からの正攻法。

衣服を全て脱ぎ全裸となり戻ってくるのを待った。

恥ずかしくなかった訳ではないが…

それ以上に私の“想い”が高まり過ぎていた。

私は彼を求めている。

戻ってきた彼は啞然として薪を落としていた。

顔を真っ赤にして…

だから揶揄いたくなつた。

挑発的に肢体を見せ付け、彼を揺さぶった。

ただ、それが裏目に出る。
また私の方が負けた。

自分でも驚く程に

私は彼の言葉に胸が高鳴りそれ以上…
彼の顔を見れなかった。

焚き火を起こすと、私達は背中合わせに座った。

彼の背中が温かく…

そして、意外にも大きくて何処か安心した。

ただ、何故か不満だった。

用意した策を悉く破られて悔しかったのも有る。

彼の鈍感さに腹が立つ。

意外な己の初さに苛立つ。

けれど、本当は違う。

回り諄い遣り方しか出来ず受け身の自分が齒痒い。

情けなくて、もどかしくて仕方無い。

だから、あの時の会話では自分は妙に子供っぽくなり感情任せにな
っていた。

「…本当、馬鹿みたい…」

自分に素直になれば

彼は私を受け入れてくれ、より多くの時間を共有する事が出来たのに。

もしかしたら“現在”さえ違っていたかも…

彼は私の隣に居たかも…

そう思ってしまう。

けれど、あの時結ばれず、更に戦時中故に焦らされたからだろう…

私の中で、自分の自覚より彼の存在は大きくなった。

だから、今も彼への想いが尽きないのだろう。

満たされない故に…

充分ではなかった故に…

今も私は恋い焦がれる。

「……………重症ね…」

自嘲気味に呟く。

そう言えば…

華陀も言っていた。

“俺に治せないのは

恋の病だけだっ！”

記憶の中でさえ暑苦しいが其処は目を瞑ろう。

華陀の言葉通り

恋の病は不治の病だ。

“特効薬”は有っても…

“治療法”など、何処にも有りはしない。

もしも、治るのなら…

その想いはその程度。

けれど、私は違う。

尽き絶えぬ故に不治
薄れ消えぬ故に不滅

貪欲な迄に
限り無く求め

胡蝶の続きを冀う

「
情けないわね」

挫けそうな心を律する。

ただ願うだけで叶うのなら幾らでも願おう。

けれど、現実には夢の様には甘くない。

立ち止まれば全てが掌から零れ落ちてしまふ。

大切なモノ、全てが

彼を求めて、全てを失う。

それが私一人の問題ならば何も躊躇う事もない。

だが、私は魏の王。
大陸を制した霸王。

己が行いの全てに
己が歩んだ覇道に

責任を持ち、応えなければならない。

それこそが彼への誓い。

それこそが彼との絆。

だから私は

「貴女はそれで良いの？」

不意に掛けられた声。

私は静かに振り向いた。

ゆっくりと顔を左に向けて見れば、木の幹に背を預け此方を見ている者が居た。

（私が気付かなかった？）

確かに思考に没頭していたから注意力は低下していただろう。

だが、全く気取れない程に油断もしていない。

なら、考えられる可能性は限られてくる。

優れた暗殺者や密偵か…

或いは妖怪の類いか…

だが、恐らく私よりも力が上の存在だろう。

私は半身の姿勢で対峙し、腰の後ろに隠し帯びていた護身用の剣の柄へと右手を伸ばす。

「あらあら…

誰も取って食べたりしないから、そんなに構えないでくれない？」

諫める様な、けれど余裕の有る口調で言う。

声から推測すれば女…

だが、全身を包み込む黒い外套が邪魔で相手の容姿ははっきりしない。

ただ、殺気は無い。

「敵ではなさそうだけど…

油断して、殺されるなんて笑い話にもならないわ」

私は余裕たつぷりの笑みを浮かべて答える。

「ふふっ…

流石は“覇王”と言っべきかしら…」

「っ」

動揺は出さないが

その一言に頭の中で瞬時に警鐘が鳴った。

(…此奴…暗殺者?…)

だが疑問も残る。

何故、此奴は私の前に姿を晒した？

暗殺するなら仕留める事が最優先事項…

態々相手を警戒させる事は成功率の低下に繋がる。

状況と場合にも因るが…

現状では愚策。

「……何が目的？」

私は静かに問う。

すると、此奴は僅かにだが頭を上げた。

顔の殆んどは隠れているが口元だけが露になる。

何処か、人を小馬鹿にした様な薄い笑い…

挑発的な薄ら笑い…

尚且つ上から目線の態度…

私の中で苛立ちが募る。

「そうね…ふふっ…

考えてみたら？

貴女の　覇王の頭で」

「
」

グッと右手で柄を握った。

刹那

彼の声と顔が過る。

“華琳、らしくないぞ?”

そう言われた気がした。

瞬間的に見開いていた眼を静かに瞑る。

「　　つ、ふうー……………」

私は大きく息を吐く。

息と共に苛立ちを吐く。

苛立ちと共に不安を吐く。

(……………そうだったわね……………)

私は“私”に戻る。

覇王の衣は必要だ。
だが、縛られない。

所詮、衣は衣。

“私自身”ではないのだ。

（何をやってたのかしら）

思い出せば何の事はない。

彼がいつも私に対し示してくれていた。

在るが俤の私で居ても良いのだと。

それが一番大切な事だと。

私は既に知っている。

心は静かになる。
だが、温かい。

まるで

彼が傍らに居る様だ。

私は柄から右手を離す。

右手は腰に当て正面を向き堂々と向き合う。

「それで、私に何の話？」

冷静になれば簡単に相手の目的も見えた。

此奴は何かを私に伝えたいから此处に居る。
ただそれだけの事。

「曹孟徳、貴女は

再び“胡蝶”を求める？」

「……………何ですって？」

思わず殺気が滲む。

“冷静になれっ！”と心を必死に抑える。

「貴方：“胡蝶”の意味が何か解って言ってるの？」

“胡蝶”という表現は私の独自の物だ。

出逢った時から一緒の秋蘭でさえ知らない。

聞けば察しは付くと思うが言った事は一度も無い。

知っているのは私の他には“胡蝶”自身だけ。

「勿論、知っているわ

“胡蝶”：貴女が“彼”をそう例えている事も」

そう答えると、クスツ…と笑って口角を上げた。

殺ス

一瞬だが、本気だった。

しかし、無意識に放たれた筈の殺気にも動じる様子が見られなかった為…

私は冷静さを取り戻す。

「貴方の言う“再び”…

それは“胡蝶”の代用品？

それとも」

「北郷一刀の再臨よ」

私が言うよりも早く此奴は答えた。

「……信じられないわね」

だが、私は冷静だった。

自分でも驚く程静かに話を聞いていた。

「あら、もつと必死な姿で問い詰めるかと思ったのに意外な反応ね」

向こうにしても同じだったらしい。

私は真っ直ぐに見据える。

「そう？、簡単な事よ

貴方の言葉は矛盾している

“胡蝶”は“夢”…

“物語”が終われば舞台を降りるしかない

だから“胡蝶”は消えた

もし仮に“胡蝶”が戻るとしたらそれは
「

其処で私は口を閉ざす。

「 “貴女の胡蝶” ではないかもしれない？」

「……そうよ」

私は苦虫を噛み潰した様に言葉を肯定した。

彼は言っていた。

私の 曹孟徳の覇業こそ彼が現れた理由だと。

故に覇業の成った結果…

彼は消えたのだから。

だから、彼が此処へ戻ると言うのであれば…
それには新たな“理由”が存在する筈。

その理由が私ではなく…
私達でも、私達の中の誰かでもないとしたら…

彼は私の元を去る。

例え、この世界に居ても。

そんなの
堪えられる訳がない。

「貴女、つまらない女ね」

呆れた様に吐き捨てる。

「……“つまらない”？」

この私を　覇王を前に、貴方は、つまらないと？」

これには流石に頭に來た。
沸々と怒りが込み上げる。

「ええ、つまらないわ
もう少し張り合いがあると期待していただけに……
殊更にがっかりね」

両腕を上げ、両肩を竦めて溜め息を吐く。

ギリツ…と噛み締めた奥歯が嫌な音を立てる。

「お前に何が解るっ!？」

気付けば怒鳴っていた。

止め様としても…
もう止まらない。

止める気も無い。

「つまらない？

別に誰かを楽しませたくて私は霸王然としてる訳ではないわっ！

私は私の理想の為に霸王の道を選んだっ！

私は私の理想の為に大切な存在を失ったっ！

私の覚悟も、私の想いも、何も知らない癖に…

私の何が解ると言うのっ！？

答えてみなさいっ！」

感情を爆発させる。

射殺す様な眼差しを向け、怒りに任せて殺気を放つ。

「…なら、言つてあげる」

私の全てを受け流したかの様に静かに返す。

「貴女はただ“彼”を理由に逃げているだけよ」

「っ！」

ドクンッ！、と私の心臓が跳ねた様な感じがした。

「貴女は怖いの…
貴女は恐れているの…」

一歩、踏み出されると…
一歩、私は後退りする。

「失うかもしれない…
今度こそ全てを失うかも…
希望さえも残さずに…」

また一歩、進まれて…
また一歩、私は退く。

「もし“彼”が戻っても…
何も覚えていなかったら…
戻った“彼”が…
“私の知らない彼”だったとしたら…」

進まれては、後退りする。

「甘い希望に縋るよりも…」

悲しい現実の方が痛みさえ優しく感じるから…」

闘気や殺気は無い。

ただ、言葉に気圧される。

「もう二度と…」

“彼”を失いたくない…

もう二度と…

“痛み”を知りたくない…

だから
「

トンツ…と背に何かが触れ振り向むくと、木の幹だと判った。

そして

追い詰められたと。

「だから貴女は気付かない“振り”をしている…
何よりも、誰よりも

“胡蝶”を冀う“己”に」

私の中で何かが音を立てた様な気がした。

まるで硝子が罅割れた様な小さく、儂い音が

水の入った甕

何事も無ければ水を貯め、溢れる事は無い。

けれど、僅か針の穴程でも穴が空けば水は漏れる。

そして、流れ出す水により穴から罅割れ
やがて、甕は碎け散る。

「……………あ……………ああ……………」

木の幹に背中を預けながら私は否定する様に頭を振り抵抗する。

「認めなさい…」

貴女は何よりも“胡蝶”を求めている」

違う

「認めなさい…」

貴女は誰よりも“胡蝶”を欲している」

違う、違う

「認めなさい…

貴女にとって“胡蝶”こそ全てなのだと」

「　　違うっ！

違う違う違う違うっ！！！！」

私は大声で叫んだ。

宛ら、駄々を捏ねる子供の様に嫌々と全身で否定。

だが、本当に拒絶するなら眼も耳も口も塞ぎ…

全力で走って、その場から離れてしまえば良い。

なのに私は此処に居る。

冷静に自分を分析する私が此処に居る。

私は　　解っているのだ。

「ねえ…貴女は忘れたの？

“胡蝶”は“夢”の中…

けれど、“夢”は何処だと貴女は言ったの？」

そう、私は確かに言った。

“この世界が夢か現か幻かなんて…
この世の誰にも判らない”

「確かに“胡蝶”は貴女の前から消えた…
けれど、それが“終端”と誰が言ったの？」

そうだ

“彼”が消えたのは事実としたとしても…

“物語”が終わったのだと“誰も”証明出来ない。

ならば、“物語”は
“胡蝶”は

「まだ存在している」

私は答えを自ら口にする。

それを聞いて、満足そうに口元に笑みを浮かべる。

そして、笑う。

嬉しそうに、楽しそうに…

まるで玩具を見付けた子供の様に無邪気に。

「そう言えば、まだ名前を聞いてなかったわね」

私は幹から背中を離し前に進み出る。

二人の距離は凡そ三步。

互いに間合いの内。

だが、警戒は無用。

私は静かに見詰める。

「我が名は管輅

流星を導く者」

そう言いながら左手により外された頭蓋。

露になった顔に私は驚く。

独特の曲線美を描く二つに纏めた美しい金色の髪…

青玉を思わす円らで大きな強い光を宿す碧眼…

白磁器の様な艶と滑らかさを持った白い肌…

「そして

姓は曹、名は操、字は孟徳

私の真名は 華琳」

其処に在ったのは…
まるで鏡を見る様な自分の姿だった。

正直、意味が判らない。
一体何が起きているのか。

茫然とする私を見て彼女は溜め息を吐き、苦笑する。

「はあ… やれやれ、ね
“私”だから仕方無いとは思っけど…
もう少し早く気付きなさいよね？
ただでさえ
素直じゃないんだから」

そう呆れた様に言いながら彼女は肩が凝ったらしく、首筋を揉み解す。

ただ、その顔で言われると妙に説得力が有り…
ちよつとだけ腹が立つ。

「……貴女、何者？」

私がそう訊ねると眼を細め不適な笑みを浮かべる。

「別の可能性”の貴女”」

その一言で閃く物が有る。

確か“彼”が似た様な事を言っていた。

“彼”が居た世界での私は男性だったとか…

その世界の歴史と…

この世界の歴史は…

似て非なる物だとも…

それなら、更に別の世界の“私”が居ても不思議ではないだろう。

そして世界は違っていても“私”では有るのだから、ある程度は考え方も解る。

故に互いに“暗黙の了解”で話を始める。

「本当に再臨が？」

「ええ、可能よ

勿論、貴女の知っている…

貴女の愛する“胡蝶”よ」

「そうでなければ何一つも意味が無いわ

私が欲しいの唯一人…

私と 私達と生きてきた“北郷一刀”だけよ」

もう迷う事はしない。

もう逃げる事はしない。

もう偽る事はしない。

私は手に入れる。

だが、何も一つとして犠牲にもしない。

だって、私は霸王

望む全てを手に入れる。

「ふふっ…そうよ

それでこそ、曹孟徳だわ」

まるで我が子を見守る母の様に穏やかに

まるで愛弟子の成長を喜ぶ師の様に朗らかに

まるで“自分自身”を誇る様に悠然と

彼女は微笑む。

「詳しい事は此方に書いて置いたわ」

そう言つて懷に右手を入れ取り出した一冊の書を私に差し出した。

受け取つて見ると

曹魏の軍色たる濃紺の表装には白い十字文。

如何にも過ぎるが…

“私らしい”とも思う。

「親切な事　え？」

目の前の彼女は全身が光に包まれている。

「あら、時間切れみたいね

まだ話していたいけど…

それは叶わぬ願い、か

一つの世界に“私”は二人も要らないものね」

彼女は静かに呟く。

それが意味する所は：

私にも何と無く解った。

「三つ、答えてくれる？」

そう訊いた私に対し彼女は黙って小さく頷いた。

「先ず一つ目：

管輅は貴女だったの？」

「正確に言えば違うわ

私は“余った枠”を使って干渉したに過ぎないもの
詳しくは 判るわね？」

彼女は視線を書に落とす。

流石は“私”

良い読みをしている。

「ええ、なら二つ目

“貴女”はどくなる？」

「私？、私は消えるわね」

彼女はあつさりと言う。

“帰る”とは言わない。

つまり“死”を意味する。

「そう…なら最後

何故、貴女は此処までしてくれるの？」

これは

これだけは、絶対に聞いて置く必要が有る。

「私が、曹孟徳だからよ」

彼女は迷わず言い切る。

「私は他人に左右されてる人生なんて御免だわ
私は私らしく、私の人生を私の意志で歩む
だから」

其処で彼女は微笑む。

「私が掴み損ねた幸せと、悔やみ続けた人生を…
貴女には繰り返させない」

私は理解する。

彼女は“私”の“未来”の“可能性”の姿だと。

「それに、泣かされたまま引き下がるなんて
霸王として赦せないもの」

そう言つて彼女は笑う。

あの時の“彼”とは違つて何処までも晴れやかに。

全てを遣り遂げた　と。

ならば

「なら、貴女の分まで私は幸せになつてあげる
貴女が羨む程に
貴女が誇れる様に
貴女が出来なかつた全てを私は手に入れる

それが、私 曹孟徳よ」

私は応える。

私の歩む生を賭して。

「ふふっ…

私達はこうでなくてはね」

例え違う存在だとしても…
例え刹那だったとしても…

私達の志は 交わった。

「それじゃあね」

彼女の姿が空気に融ける。

「ええ、おやすみなさい」

私は永遠の眠りを告げる。

その会話を最後に

彼女は淡い光の粒となって消えて逝った。

ありがとう

華琳

寂しがり屋の

女の子

それは“あの日”の別れの“彼”の最後の言葉。

知る者は“私”と“彼”の二人だけ

「趣味が悪いわよ…：ばか」

最後まで“らしい”彼女に言葉を贈り

私は蒼天を見上げた。

「貴男は私を泣かせた…

その責任は取って貰うわよ
色々、覚悟していなさい
だから

また会いましょう、一刀！

今度は絶対に離さないわ」

閑話 孫呉御一行様

陳留の南

炎緋に金色の“孫”の旗を靡かせ、北へ向けて街道を行軍する一団が有った。

「ふゝん、ふゝん」

鼻歌を歌いながら上機嫌で馬上に在るのは腰程の長さの綺麗な桃色の髪的女性。

戦場では鋭く輝く切れ長の碧眼は子供の様に緩む。

名は孫策、字は伯符。

真名は雪蓮

孫呉の王、江東の小霸王。

「……上機嫌だな」

その様子を右斜め後ろから馬に乗って見詰める黒髪の女性は小さく溜め息を吐き僅かにズレた眼鏡を直す。

硝子の奥で緑色の瞳が頭に浮かぶ苦勞に嘆いていた。

名は周瑜、字は公瑾。

真名は冥琳

孫呉の大都督、呉の良心。

眉間の皺は氣苦勞の証。

また“美周郎”と称される美貌の持ち主でもある。

「仕方無いですよ」

三国初の大規模な催しですからね」

左隣に馬を並べている薄緑の髪の女性が暢氣な笑顔を浮かべながら答える。

名は陸遜、字は伯言。

真名は穩

孫呉の次代を担う支柱。

冥琳の弟子でもある。

“たわわ軍師”なる異名も持っていたりする。

「そうそう、堅苦しい事は抜きにしないとね
シャオも凄じしみ」

二人の前　雪蓮の左隣を馬ではなく“白虎”の背に乗り、“大熊猫”を従えて進む桃色の髪を頭の両側で輪を作る様に纏めた少女が笑顔で振り向く。

まだ幼いが雪蓮に似ている顔立ちは当然。

名は孫尚香、真名は小蓮。

お転婆な孫家の末姫。

最近は宮中での悪戯が酷くなってきたとか。

「何を言っているの！

三国初の公の催しであればこそ礼節が大事だ！

小蓮、大体お前はだな…」

雪蓮を挟んだ向かい側

雪蓮の右隣に並んだ短めの桃色の髪の女性が窘めつつ説教を始めた。

彼女も雪蓮に

そして小蓮に似ている。

名は孫権、字は仲謀。

真名は蓮華

孫家の次女で、次期呉王。

尤も、本人はまだ知らないのだが。

また“大陸一の美尻”等と一部で称えられている。

「し、思春殿！

どど、どうしましょう！？」

その様子を見て

蓮華の後方、馬の頭に隠れそうな小柄な身体に赤みの有る黒髪の少女は右隣へと慌てて顔を向ける。

名は周泰、字は幼平。

真名は明命

孫呉随一の隠密。

孫権の忠臣としても周囲の評価は高い。

本人の自覚は別として。

「…落ち着け、明命
いつもの事だ」

明命の右隣に居た紫の髪の女性は小さく溜め息を吐きながら答える。

名は甘寧、字は興霸。

真名は思春

孫呉の水軍指揮官。

元江賊 錦帆賊の頭。
“蓮華命”の忠臣。

「いつもの事、ですか…
確かに思春さんの言う通りかもしれませんね」

達観した様な思春の言葉に栗色の髪を襟足でお団子にした片眼鏡の少女が明命の左隣で感心している。

名は呂蒙、字は子明。
真名は亞莎

孫呉の次代を担う一人。
かつて“阿蒙”と呼ばれていた頃は雪蓮以上の戦狂いだったとか。
人は見掛けに因らない。

「はっはっはっはっはっ
何とも賑やかな事じゃな
やはり、こうでなくては」

雪蓮の後方
忠臣の列の中央では薄紫の髪を揺らしながら楽し気に笑っている女性。

名は黄蓋、字は公覆。
真名は祭

孫呉一の宿将。

先代・孫堅の時代から仕え赤壁の戦いに置いては己を犠牲に策を仕掛けた。

「やれやれ…」

生きて帰られたかと思えば性分は相変わらずですね」

左隣の冥琳は溜め息を吐き皮肉を言う。

だが、口元は綻んでいる。

「祭が帰ってきた時、他の誰より真っ先に抱き着いて泣いて喜んだのは誰だったかしらね？」

雪蓮は振り向いてニヤニヤ笑いながら冥琳を見る。

「…はて？」

その様な者が居たか？
覚えているか亞莎？」

「えええーっ！？」

わ、私ですかっ！？」

冥琳からの無茶振りに驚き戸惑う亞莎。

「姉様だけならいざ知らず冥琳まで…
亞莎を苛めてやるな」

蓮華が助け船を出す。

「私だけならってどういう事なのよ、蓮華？」

「判らないなら、御自分の胸に聞いて下さい」

「じゃ、冥琳聞いてー」

「断る」

妹と親友に邪険にされると「ぶー…」と口を尖らせて拗ねる雪蓮。

孫呉の中核たる9名。

その護衛の精鋭が20名。

御一行は“天遣想祈祭”の為に魏を訪れていた。

「でも、祭が帰ってきたは吃驚したよね」

小蓮が思い出した様に祭を見て言った。

赤壁の戦いで黄蓋は敵陣に乗り込み、火計を謀った。

美周郎と伏竜鳳雛は練った“連環の計”を行った。

だが、魏は両の策を破り、夏侯淵　秋蘭の射た矢により黄蓋は倒れた。

黄蓋は死んだ

敵味方問わず戦場の誰もがそう思っていただろう。

しかし、唯一人だけ例外が存在していた。

“天の御遣い”

“北郷一刀”である。

呉との戦に向けて立つ前、彼は華琳の命で華陀という旅の医師の元を訪れ診察を受けていた。

その時、彼は華陀に一つの頼み事をした。

それは

“ 赤壁の戦いの中
黄蓋と部下達が河を
流れてくる
だから、助けて欲しい”

という物だった。

俄には信じられない言葉。

だが、彼の眼を見た華陀は言葉を信じた。

華陀が長江

赤壁の下流で待っていると本当に黄蓋が流れてきた。

流石は夏侯妙才というべきだろう。

矢は黄蓋の心臓に真っ直ぐ刺さっていた。

しかし、その腕前のお陰で無駄な傷が無かった。

出血は酷かったが予め準備していた為、何も問題無く治療は成功した。

黄蓋と部下達は華陀により北郷一刀の用意した場所で軟禁状態になる。

但し、これは治療を優先し療養させる為。

ただ、戦時中という理由も有って連絡は不可だった。

その後、黄蓋が意識を取り戻したのは二ヶ月後。

既に戦争は終結

三国同盟の誕生も彼女等の耳に届いていた。

その後、黄蓋の体調が戻り建業へ帰り着いたのが…
今から三ヶ月前。

その一ヶ月後の三国会議に彼女が出席すると
魏と蜀の者達は軽い混乱を起こした。

そして、事の真相を聞いて更に驚いていた。

華陀曰く

“北郷”の言葉がなければ間違いなく死んでいた。

また北郷曰く

“未来を守る為に彼女達を失う訳にはいかないんだ”
と、華陀に向け言ったらしい。

彼の名は世に轟く。

まるで全てを見通したかの様な奇跡の御業。

赤壁での策を見破った上、忠臣たる敵将を助け…

霸王と共に歩み、大陸へと平和を齎した…

“天の御遣い”

元々、魏では霸王と同格の存在感だったらしいが…

呉蜀に於いては一気に名が高まったのは間違い無い。

戦後から“天の御遣い”を神格化し始めた魏。

戦時中ではなく、戦後。

つまり“平和の象徴”に考えての事だろう。

彼が天へと“帰った”事も一因かもしれないが…
それは定かではない。

だが、それは呉蜀にとって良い事ではなかった。

魏に主導権を握られる事を懸念すれば当然の事。

ただそれも今は過去の話。

宿将・黄蓋とその部下達を救った事で呉の中枢：
呉の民には“恩人”として称えられる事になった。

「しかし、北郷という男は掴み所がなかったな…」

冥琳が静かに呟く。

最初の三国会議にて魏から提案された街の警備方法。

眼を通してみれば…

“見事”としか言う言葉が見付からなかった。

単純な警備体制の強化案と思っていたが…違った。

治安の維持・向上を礎に、各地・各所に合わせた形を築く事が必要
性と方法…

更には、それに伴う経費や人材の確保…

人材の育成の仕方…

予期される問題点の予防と改善方法…

また経済効果に至るまで…

案は事細かに、先の先まで考えられていた。

「私は連合の時に少しだけ見たただけけど…
祭はどうなの？」

雪蓮は祭に訊いた。

「街の警備隊の隊長で…
華琳殿の個人的な客将だと言っただけだが…
正直、よく解らぬな
あの時は、只の孺子にしか見えなんだしのう」

祭は思い出しながら苦笑。

そんな相手に、自分は命を救われたのだから。

「…秋蘭が言っていたな
決戦の前、警備隊の者達を使つか迷っていた時…
北郷は“戦後”を見て案を否定した、と」

「それはつまり
魏は常に余力を残して戦に臨んでいたと？」

冥琳の言葉に蓮華の視線と声色が厳しくなる。

「それは違うわよ、蓮華

北郷は華琳の勝利を信じて“未来”を見ていた…
“勝たなくて…”なんて考えは一切無く、ね」

雪蓮は静かに、諭す様に、蒼天を見上げて言う。

その様子を見て冥琳は同じ考えに至った事を知る。

我々や劉備達と違い

唯一人

“戦後”を見て動いた。

勿論、戦に勝たなければ、その後の事を幾ら気にした所で何の意味も無い。

だから、我々は
ただ“勝つ事だけ”を考え戦っていた。

けれど、北郷だけは
戦場ではなく

“未来”を見ていた。

華琳の 曹孟徳の勝利を信じていたが故だろうか…

果たして、自分に彼の様な真似が出来るか…

己が主

私の場合は雪蓮になるが…

戦の全てを任せ

先の事に備えられるか？

(……………到底、無理だな)

我々は勝利に固執し過ぎ、本懷を見失っていたが故に敗北したのか
もしれない。

(あの決戦に於いて…

最後まで自らの信念を貫き通したのは…

魏のみ、という事が…)

そう思うと今の三国同盟も彼の“仕込み”に思えた。

(…いや、恐らく魏の者は彼との歩みの中で少しずつ変わったのだ
ろう…)

何の証拠も無い考えだが…

冥琳には何故か…

正解の様な気がした。

冥琳が陳留に向け先触れを指示して送り出すと隊列はバラバラになった。

早くも御祭り気分になってきたのだろう。

好き勝手に会話しながらも行軍に支障は出て無い。

（やれやれ…

まあ、余計な問題さえ誰も起こさなければ構わんか）

そう考えながら

冥琳は要注意人物

主に雪蓮の手綱をキツく、絞っておこうと思う。

「華琳達、大丈夫かしら」

噂をすれば

いつの間にか隣に来て居た雪蓮がぽつりと呟いた。

陳留では華琳の噂をすれば華琳が現れると聞くが…

まさか、呉も例外ではないのかとか考えてしまった。

「……気付いていたのか」

冥琳は思考を戻しながら、意外そうに返す。

「そりゃあ、あれだけ戦や何やらで顔を会わせてれば嫌でも違和感に気付くわ」

雪蓮は苦笑する。

かつては、覇を競い合った敵同士…

今はあの乱世を生き抜いた戦友であり、盟友。

縁とは不思議な物だ。

「華琳達にとって…

“北郷一刀”という存在は“天の御遣い”の名以上に大きかったの
だろうな」

冥琳は静かに思いを巡らし彼女達を想う。

考え方だけなら

逝った者の志を継ぎ進めと叱咤激励出来る。

だが、現実には難しい。

普通なら泣き叫び

沈み鬱ぎ込んでしまっても変ではない。

愛する者が“存在”を賭し築いた“平和”

それを守り、繋ぐ事に心が気付くには時間が要る。

しかし、彼女達は立った。

一人も欠ける事無く。

志を一つに歩みを止めず、“未来”へと向かう。

ただ

「見てる此方が痛々しくて仕方無いのよね…」

雪蓮は苦笑して見せる。

しかし、彼女が心を痛めている事は冥琳には手に取る様に判った。

冥琳もまた、同じ気持ちで心を痛めていたから。

「…何か見付かりそう？」

「…はつきりとは言えんな
事が事だけに難しい」

「そう…」

会話は直ぐに終わる。

呉は密かに“天”に関する情報を集めている。

それは魏の為、朋友の為…

そして何より

自分達の恩人の為に。

「取り敢えず、向こうでは“呉々も”騒がない様に」

「はいっ」

冥琳の言葉の真意を汲み、雪蓮は笑顔で答える。

（少しの間だが…
気を紛らわす位は出来る
束の間の“夢”を楽しめ）

冥琳は親友の自由奔放さに少しだけ期待し微笑んだ。

第三話 胡蝶への道

曹操の城

“天遣想祈祭”は二日目を迎えていた。

初日となる昨夜は呉蜀から訪れた皆と無礼講の宴。

二日酔いに苦しむ者も居るだろうから…との配慮から特別な催しは無い。

とはいえ、街の賑やかさに誘われ客人達は城外へ。

よって、昨夜の後片付けをする侍女や兵士を除けば、実に静かな物だった。

そんな城の通路を春蘭達が歩いていた。

「しかし、華琳は何やてウチらを集めよんの？」

「私に聞けよっ！？」

霞は頭の後ろで手を組んだ格好で、隣を歩く春蘭ではなく首を捻り、態々後ろの秋蘭を見て訊ねたので…

透かさず春蘭がツツコミを入れた。

「なら、何でやの?」

「私が知る訳ないだろう」

霞の問いに、春蘭は堂々と胸を張って答える。

「……………なあ、秋蘭

いっぺん、マジで殺してもええか?」

「殺しても直らんぞ?」

苛立った霞の言葉に秋蘭は“無駄な事だ”と言つ様に言葉を返す。

「取り敢えず、ウチの気が収まる位やなあ……」

そう呟き、横目で前へ出た春蘭を見る霞。

秋蘭の言葉で、既に怒気も削がれていた。

「で、どうなん?」

「私も詳しい事は聞いてはいないのでな…ただ」

秋蘭は“前”を見る。

「……一刀絡み、か」

霞が続きを呟く。

華琳からの招集自体は殊更珍しくも何ともない。

が、場所が違う。

いつもなら玉座の間。

或いは中庭か東屋。

急ぎでも華琳の執務室。

なのに今回は一刀の部屋。

一刀が居た時を含め

今まで、一度も“全員”で集まった事が無い。

「…そっぴゃあ、昨夜から様子が変わったなあ」

「うむ…」

霞の言葉に秋蘭も頷く。

昨夜の彼女は妙だった。

今までの“翳り”が消え、何処か“そわそわ”としている様に見えるた。

「……新しい恋でも
いや、それはないやろな」

“したか？”と言い掛けて霞は自分で否定する。

その程度で乗り越えられるのなら、誰も心を痛めなどしない。

「あー！、春蘭様、霞様、秋蘭様なのーっ！」

元気な声に目を向ければ、息を切らせながら、中庭を抜けてくる人影が三つ。

「何だ？、随分と急いで
何か有ったのか？」

その様子を見て、不思議に思い訊ねる春蘭。

「いえ、真桜が寝ぼ」

「わぁーっ!？」

何でもないーっ!

何でもないんですーっ!!

風の口を真桜は塞ぎ必死に叫んで誤魔化した。

風達を加え、一刀の部屋へ向かうと

「おやー?」

「魏の武将がお揃いで…
何か有りましたか?」

部屋の前で風と稟に会う。
が、様子がおかしい。

「何や?、風も稟も華琳の招集聞いてへんの?」

霞がそう言つと二人は顔を見合わせ、首を横に振る。

「私達は城に戻る様にとの伝言を受けただけですね」

そう稟が答える。

「…変だな」

「変やな」

「変ですね」

「変やね」

「変なのー」

「変態ね」

「うむ、変態だ」

と春蘭が言った時点で全員が沈黙する。

「なんや、桂花か…」

「期待外れな物を見る様な眼で見ないでくれる？」

「よお判つ　むぐつ！？」

霞の言葉に睨み返す桂花の発言につい乗っかり掛けた真桜の口を尻と沙和が手で塞いだ。

「桂花も知らないのか？」

「招集の事なら聞いてるわ
というか風と稟が知らないのは、言う前に二人が街に出てたからよ
だから城に戻る様に伝言を頼んだの」

秋蘭の質問に桂花は経緯を踏まえて答える。

「あつ！、春蘭様ーっ」

「ちょっ　季衣っ！？
気を付けてよーっ！？」

一同が声の方に振り向くと茶器を持った季衣と
御菓子の入った皿を持った流琉が此方に来ていた。

それを見て一同は更に謎を深めた。

「…流琉、それは誰が？」

「これですか？

華琳様ですけど…何か？」

秋蘭の質問に答えた流琉は小首を傾げる。

流琉も詳しくは知らないとその反応で読み取れた。

桂花と稟も“一体何？”と答えを見付け兼ねている。

「あら、思ってたより早く皆集まったのね」

『華琳様っ！』

噂をすれば　ではなく、“本人”の登場に皆が声を揃えた。

「流琉、季衣

中へ運んで用意して頂戴

風達は足りない分の椅子を探して来て頂戴」

『はいっ！』

華琳の指示に五人は直ぐに行動を始める。

「あの、華琳様…
これは一体？」

恐る恐る訊ねる稟。

「詳しい事は準備が出来てから話すわ」

そう言つと華琳は流琉へと近寄り指示を出す。

春蘭・桂花は“手伝い”を志願するが玉砕した。

「御茶会つちゆう感じとはどっかちゃうなあ…」

「そうですね…」

気にはなりますが…」

「まあ、直ぐに判るか…」

霞・稟・秋蘭は部屋の外で佇みながら呟いた。

今、一刀の部屋は御茶会の会場になっていた。

台と机に湯呑みが並び…

十二人の乙女達が集う。

だが、雰囲気は和やかとは御世辞にも言えない。

「…さて、集まって貰った理由を話す前に…
一つだけ、確認するわ」

華琳が真剣な表情で言うと思わず全員が息を飲み…
姿勢を正した。

華琳は全員を見てから口を開いた。

「皆、一刀に会いたい？」

『　　っ！！！？？？』

その一言に、全員の表情に驚きが浮かぶ。

それは当然だった。

他の者達

春蘭と桂花以外は一度位は誰かの前で“それ”を口にした経験がある。

春蘭と桂花でさえ一人なら思わず眩き、洩らした事が少なからずあった。

だが、華琳だけは違った。

決して“それ”を口にする事は無かった。

言えば楽になるだろうが…

彼女の性格　主に誇りがそれを許さなかった。

そんな華琳が自ら口にしたとなれば誰でも驚く。

同時に

今まで不確かだった“光”が眩く輝くのを感じる。

身も心も熱く染まる。

「どうなのかしら？」

そう皆に訊ねる華琳。

本当に　随分と久し振りに見る“らしい”微笑みを浮かべている。

「華琳様、此処には一刀に会いたくない者など一人も居はしません

っ！
」

答えたのは春蘭。

彼女もまた、久し方振りに高揚した笑みを見せる。

「我等は“北郷隊”です」

「隊長有つてのウチらや」

「隊長に会いたいのっ！」

凧・真桜・沙和が続き

「ボクも会いたいつ！
兄ちゃんに会いたいつ！」

「私も会いたいですっ！
兄様に会いたいですっ！」

季衣と流琉が叫び

「愚問ですね」

「当然なのですよー」

「…ふんっ、顔位は見せてから死んで欲しいわね」

「ふふっ…全くだ」

稟・風・桂花・秋蘭は顔に余裕を浮かべて答え

「一刀に会えるんやったら何でもしたるっ！

邪魔すんなら神でも天でも打ちのめしたるでえっ！」

最後に霞が鼻息も荒く拳を華琳の前に突き出した。

「当然だっ！

我等は華琳様の剣っ！

我等は霸王の剣っ！

我が曹魏に敵は無いっ！」

春蘭が士気を高め霞の拳に掌を乗せると皆が続く。

重なり合う十一の掌。

「ふふっ、良い覚悟ね
その言葉、その意志…」

決して、忘れないで頂戴」

最後に華琳が掌を重ね…
楽しそうに笑った。

一同は席に座り直す。

視線は華琳に集まる。

「先ずは結論から言うわ」

此処までして“無理”とは言わない事は判っている。

だが、それでも緊張は有りゴクツ…と息を飲む。

「一刀は帰って来られる」

『　　つ！！！！！』

華琳の言葉に、歓喜の花が一斉に咲いた。

だが、冷静な者も居た。

「……………華琳様

“帰って来られる”とは、どういう事ですか？」

そう訊いたのは稟。

その言葉に秋蘭・桂花・風が気付く。

“帰ってくる”ではなく、“帰って来られる”

それが意味する所は…

「一刀は“自分の意志”で“帰ってくる”事が不可能だという事よ」

華琳は平然と答えた。

理解出来てない者達は顔を顰め、首を傾げる。

既に同じ答えに至っていた四人は冷静だった。

華琳の不動の姿を見れば、“先”が有るのだと判る。

「順に説明すると…

先ず、一刀は“この世界”からは“消えた”けど…
一刀の世界

私達の言う“天の世界”に帰ってはいないわ」

「ちょっと待ってや華琳
ほんなら一刀は何処に？」

華琳の説明に霞が訊く。

“黙って聞いてなさい”と言わんばかりに頭脳派四人の視線が霞に刺さる。

華琳は気にせず答えた。

「一刀は“世界の狭間”を彷徨ってる状態よ」

華琳はお茶を一口啜ると、右隣に座る春蘭の湯呑みと隣り合わせに置く。

そして、右手の人差し指で湯呑みを指し

「此方が私達の世界…」

其方が天の世界…

一刀が居るのは 此処」

そう言って二つの湯呑みの間に人差し指を立てる。

「ただ“狭間”と言っても何か有る訳じゃない…
其処は虚無の世界…
長く居続ける事は…
存在の“消滅”に繋がる」

華琳の言葉に全員が緊張と違った意味で息を飲んだ。

「だからと言って簡単には事は進まないわ
一刀の“消滅”までの時間は一刀の意志次第…
でも、一刀なら大丈夫
そうでしょ？」

華琳は皆を見回し微笑む。

そう 皆、判っている。
彼女達は知っている。

“北郷一刀”は

“どんな時でも諦めない”

そういう男だと

ただ、それだけの事。
だが、それだけで十分。

余計な不安は消え去る。

「だから、その間に私達は一刀を呼び戻す為の準備を整える
勿論、出来る限り迅速に」

その言葉と全員が頷いた。

「さて、その準備に関して説明するわね

そもそも、一刀はその存在自体がこの世界で“異質”なのは皆も知
つての通り

ならば：“何故”、一刀は“異質”で有りながら存在出来たのか：
誰か答えられる？」

華琳が見回すと：

風が静かに手を上げた。

華琳は視線で発言を促す。

「仮の話ですがー：

“存在”する為の“器”が在ったから、ですかー？」

風の言葉に華琳は微笑む。

「その通りよ

一刀が“存在出来た”のは“杵”が在ったから…
そして

その“杵”こそが一刀を、彼がこの世界へ来る事を、全ての者に
認識”させた始まりの存在 」「

「……管輅……」

秋蘭が目を見開きながら、その名を呟いた。

「そう…

“管輅”が“天の御遣い”の降臨を予言し…

一刀はこの世界に現れた

そして、誰もが“管輅”の名を知っているのに…

誰も顔を知らない…

不思議だとは思わない？」

言われてみて初めて気付く“違和感”に戸惑う。

それを見て、華琳は静かに瞼を閉じる。

何故…

誰も知らないのか？

何故…

誰も気にしないのか？

何故…

私は気付かなかったのか…

頭の中で“終わり”なく、疑問が渦巻く。

華琳はゆっくりと瞼を開け答えを示す。

「“管輅”とは

“星の導き手”の事…

“天の御遣い”の降臨

“外史”への参入を補助し認知させる為だけの存在
つまりは“道標”なの

だから、あの占いの事なら殆んどの者が知っている

なのに、その正体は不明…

それは当然ね

“管輅”に必要なのは名と存在の“粹”だけ…
そして、“天の御遣い”が降臨すれば役目を終える

“粹”を残し、消え去る

故に、誰も“管輅”に対し疑問を持たない

そして、その空いた“枠”を使って“天の御遣い”が存在する事が出来る…

これが

“管輅”という存在の持つ“仕組み”よ」

華琳のした説明を理解する事が出来たのは半数…

正直に言っ て疑問符ばかり増えている状況だった。

「これは理解出来なくても構わないわ

今後にも特に支障は無いし聞き流しなさい」

“解る者だけ質問なさい”と暗に言わんばかりの発言だが半数の者は安堵した。

「あの一、華琳様ー

先程言われた“外史”とは何ですかー？」

風が訊ねる。

「“外史”とは言っ たら“可能性の世界”よ」

そう言いながら華琳は皆を見て次の言葉を継ぐ。

「例えるならば書物ね
此処に居る者で…そうね

“劉邦”を主役とした話を書くとしましょう

物語の骨子となる史実

これが“正史”と呼ばれる“過去”の“流れ”よ

物語は“書き手”によって表現や解釈が異なるし…

場合によつては盛り上げる為に登場人物等を“創作”する事も有るでしょう

物語は“正史”から派生し“書き手”の数だけ新しい“世界”となる

この“世界”が“外史”…
似て非なる“異世界”よ」

理解出来た者は驚きに目を見開いている。

だが、それでも頭を捻っている者達も居る訳で…

「更に噛み砕いて言えば…
“こう有れば”とか…
“こんな風なら”とか…

“想像”した事が形取った存在が“外史”なのよ」

仕方無く華琳が付け足すと“成る程っ！”と理解した声が上がった。

「成る程…

そう考えれば、一刀の言う“天の歴史”と…

我々の在る世界の“現実”とが、何処か“似ている”のも頷けるな…」

「…でも、それだと私達は“物語”の登場人物だって事にならない？」

秋蘭の言葉に桂花が疑問を突き付ける。

「それは“主観”の違いで説明出来ますね」

「ですねー

この世界を基準にすれば、お兄さんの居た天の世界が“外史”になりー

天の世界を基準にすれば、この世界が“外史”という事になりますねー」

凜と風が桂花の疑問に答え四人は華琳を見る。

「“外史”の位置付け論は各々適当に解釈なさい
大切なのは

私達は“此处”に在り…

一刀が“此处”に居ない、その“現実”よ」

その一言に場の空気が張り詰めた。

華琳は戻った緊張感に対し満足そうに微笑む。

「一刀は今、何方付かずの宙ぶらりんな状態よ」

「あの変態らしいわね」

「流石、魏の種馬やね」

「隊長らしいの」

桂花・真桜・沙和が華琳の言葉にツツコんだ。

やっぱり危機的状況下でも“優柔不断”は直らないのだろうと皆が
納得。

「理由は簡単よ

一刀は本来は“向こう”の存在だから在るべき世界へ戻ろうとして
いる

けれど、一刀自身の意志は“此方”へと“帰る”事を望んでいる」

判っけていても…

改めて言われると切なさが胸を締め付けた。

ふと、其処で疑問が浮かぶ者が居た。

「あの、華琳様…

一刀殿は“何故”消えたのでしょうか？」

稟が静かに訊ねる。

「…正直、難しい質問ね」

華琳は小さく息を吐く。

湯呑みを持ち、茶を飲んで口と喉を潤す。

「…恐らく“起点”は私

“曹孟徳に天下を与える”

それが一刀の

“天の御遣い”の役目

だから、その意味で言えば“役目を終えた”存在故に“舞台”から

“消えた”」

華琳の言葉に全員が黙る。

なら、天下を取らなければ一刀は消えずに済んだか？

そう訊かれて“そうだ”と誰が答える？

誰が保証出来る？

仮に出来たとして

その為に“諦める”事を、“北郷一刀”は良しとするだろうか？

答えは 否。

私達が惹かれ、変えられ、愛した彼ならば

“諦めるなっ！”と叫び、叱咤する。

それは可能性ではない。

確信を持って断言出来る。

「では、私や流琉を助け、苦しんでいたのも……」

そう呟き俯く秋蘭の言葉に流琉の顔が悲しみに歪む。

流琉の隣に座る季衣までも泣きそうになっている。

「それは違うでしょうね」

だが、華琳は即座にそれを否定する。

三人は顔を上げた。

「もしも仮に“死ぬ筈”の者が“生存”する事により一刀の存在が揺らぐのなら彼が“残っている”時点で矛盾してくるわそれに私に 私達に天下を与える事で存在が消えるというのもおかしいのよ

“管輅”の“杵”は今でも在り“空席”のまま…

降臨した“天の御遣い”が役目を終えて消えたのなら“杵”も用済みな筈…

なのに“杵”は今も在る」

「…一刀殿が消えた事には何か“別の理由”が？」

稟の瞳が華琳を見詰めると華琳は真っ直ぐに見返す。

「もし、一刀が消える事で私達が“試されている”としたら？」

『…っ！』

全員が目を見開く。

「天の御遣い」が天下に平和と安寧を齎すのなら、それを維持し、繁栄させるのは“私達”の役目：

つまり、彼奴が消えたのは“何者か”による“試練”という訳ですか？」

桂花が軍師の表情で訊くと稟も風も目付きが変わる。

“主”に“敵”が居るなら戦う術を練るのが彼女達の役目。

「“何者か”ではないわ私達を試しているのは

“この世界そのもの”よ」

そう言つて、華琳は不適に微笑んだ。

華琳の予想外の発言。

だが、心が揺れる者は一人として居ない。

「…ふふっ…

世界、世界ですか…

なあ、霞、面白そうだとは思わないか？」

春蘭は楽しそうに笑う。

「ああ、オモロイなあ…

こんなにワクワクすんのは赤壁以来やなあ…」

霞もまた恍惚とした笑みを浮かべている。

「つたく、この脳筋達は…

少しは考えなさいよね」

そう呟く桂花だが、口元は狡猾な笑みに歪む。

見回せば

皆が皆、各々に“らしい”笑みを浮かべている。

「じゃあ、士気も高まった所で本題に入るわよ？」

『はっ！』

懐かしい

“霸王軍”の軍議の空気が場を支配する。

「一刀が帰って来れるかは最後は本人の意志次第よ
だけど、それを可能にするのは私達の行動如何…
それを心して置きなさい」

華琳の言葉に全員が力強く頷いて応える。

「私達が成すべき事…
それは“各々の試練”へと挑み、成し遂げる事よ」

そう言つて、華琳は懐から一冊の書を取り出し、台の上に置いた。

曹魏の軍色の濃紺の表紙に白の十字文。

「華琳様…これは？」

春蘭が書を見て訊ねる。

「“外史”の“私達”から託された“意志”よ」

『　　っ！！？？』

そう言つて、華琳は右手を伸ばし表紙を捲る。

其処には

先程、華琳から説明された事が書かれていた。

見覚えの有る

“曹孟徳”の筆跡で。

「彼女達は“未来”：

一刀を失つたまま後悔して生きる“私達の可能性”

けれど、彼女達は諦めず、戦い抜き、私達に“志”を託して逝つたわ」

華琳は“彼女”の姿を思い出しながら話す。

「叶うのならば、彼女達も自分の手で成し遂げ一刀と共に歩み生きたかった：

けれど、叶わなかった

だから、彼女達は託した

“未来”を変える為に

“可能性”を持つ私達へ」

静かな、けれど揺るぎ無い華琳の言葉。

「此処には私達自身からの言葉で、各々の“試練”の事が記されているわ
今から順に読みなさい」

そう言うalmaz、春蘭へと書を手渡した。

春蘭を始め、秋蘭、桂花、霞、季衣、流琉、稟、風、凧、真桜、沙和と読む。

そして、書は華琳の手元へ戻って来た。

「皆、自分の挑む“試練”は判ったわね？」

だが、華琳の言葉に答えず互いに見合い複雑な表情を浮かべていた。

半数は“何とかなるか”と覚悟を決めた様な表情。

しかし、残る者達は表情を青くしている。

「…まあ、内容には一通り私も目を通したから…
貴女達の反応も頷けるわ」

華琳は“やれやれ…”と、小さく溜め息を吐く。

「……なあ華琳

ウチ、ホンマに“コレ”をせなアカンの？
交換とか駄目なん？」

珍しく霞の弱気な発言。

「見苦しいわよ、霞」

だが、叱咤したのは桂花。

「んな事言うたかて…
アンタのも結構」

「全部、彼奴の所為よ」

「へ？」

霞は自分と同様に青ざめていた桂花からの言葉に対し反論　もと
い同意を得る様な事を言おうとしたが、桂花の言葉に遮られた。

そして、意外な言葉に霞は呆然とするが桂花の言葉は止まらない。

「全部彼奴が悪いのよっ！

私の苦しみも、悔しさも、痛みも、辛さも、悲しみも　寂しさも
っ！

全部、全部、全——部っ！

彼奴の所為よっ！！！！
だから

“帰って来たら”キツチリ責任取らせてやるわっ！”

興奮気味に叫ぶが

その瞳には静かに燃え盛る“炎”が輝き、宿る。

“そう思えば

何でも出来るでしょ？”

そう桂花の目が言っている様に霞は感じた。

「　　ははっ、そうやな

全部一刀が悪いねんな」

霞は笑う。

皆も笑う。

そうだ、どんな事でも今の自分達を退かせられない。

取り戻すと　否。

必ず手に入れると決めた。

愛する人と共に在る未来を

だから、折れはしない。

その様子に華琳は微笑む。

「但し、一度に全員揃って“試練”に挑む様な訳にはいかないわ

先ずは“天遣想祈祭”中に各国への協力の要請を

同時に各部署の調整と配置・振り分けの見直し

また各々の任の引き継ぎも忘れずに行う事

行動は迅速、かつ正確に

“天遣想祈祭”終了と共に私達は各々“試練”の地へ向かう事とする
以上、直ちに行動に移れ」

『御意っ！』

華琳の一声に全員が部屋を後にして城内へと散る。

華琳は部屋の入り口に立ち両手を扉に掛けて佇む。

静かに部屋の中を見詰め、微笑みを浮かべる。

「…次に私達が此処に来るのは“貴男”が帰った時
その時は ふふっ…
覚悟しなさいね？」

“彼”の戸惑い、叫ぶ姿を想像しながら

華琳は静かに扉を閉める。

次を開く

その時に、想いを馳せて。

第四話 真桜の試練

魏国

“彼方”の“正史”ならばこの時代は、まだ“許県”であり

また“帝”が居る都とされ魏の中枢となる地。

だが、“此方”の“正史”に於いては“帝”も居らず魏の首都でもない。

なのに“許昌”とは
“奇妙”な物だ。

ただ“此方”の“現実”と“比較”する物が無ければ“事実”は一つだけ。

誰も“違和感”など感じもしないのだ。

そう

私達が知る“現実”など、“世界”の“欠片”にしか過ぎないのだ。

それでも、今在る“現実”を見詰める事が

「
つてえ！

どんだけ、無駄に前振りが長いんやつ！」

思わず、ツツコミを入れてしまった。

“既視感”だと感じるのは決して、“気のせい”ではなかったりする。

「確か：“でじゃぶ”とか“隊長”が言ってたなあ」

いつだったか、“隊長”が呟いていたのを聞き訊ねてみた事が有った。

まあ、それはそれ。

手元の竹簡に目を落とすと先程の言葉が文として書かれている。

「あん時は、お陰で皆から白い目で見られたなあ……」

“隊長”の部屋に集まったあの日の“試練”に関する記述を読んだ時

“自分”の書いた筈の文にツツコミを入れた。

「まあ、ウチらしいっちゃウチらしいんやけどねえ」

ツッコまされた瞬間

“流石はウチやねっ！”と感心したが…

周囲の反応は冷やかで、“可哀想”な物を見る目をしていた。

「しゃあないねん…

それが“ウチ”やねんし」

そう呟き、イジケてみる。

だが、有る筈の“反応”が無い事に寂しさを覚えた。

「……………」

やっぱ、凧達が居らんと…調子出えへんなあ…」

一人愚痴りながら許昌へと馬を走らせる。

現在地は陳留の南の街道。

まだ、陳留では“祭り”の真っ最中。

なのに彼女 真桜だけは一足先に“試練”へ挑みに許昌へ向かつ

ていた。

彼女の“試練”は

右手に持った竹簡の続きに目を落とす。
勿論、無駄な“前振り”は飛ばして。

さて、肝心の本題や。

ウチに与えられた“試練”ゆうのはな…
ある意味、必然

そう、必然なんやつ！

云うなれば“宿命”っ！

“稀代”の“絡繰り師”…
李曼成の負いし“宿命”がこの“試練”へ誘うっ！

そう、これは“天命”…
“絡繰り師”としての才を生まれもったウチに対する“天命”なん
や

と、自画自賛が暫くは書き綴られている。

勿論、書き手も、読み手も“似た者同士”…

故に“無駄な文句”を読む“苦痛”は無く

「せやろ、せやろっ」

寧ろ“嬉々”としており、満足且つ得意そうに笑顔で一人頷いていく。

余談だが、此処だけ何度も読み返していたりする。

と、そんな“無駄話”は脇に退けよう。

そんでや、そんなウチへの“試練”はな…
ある人を倒す事や。

その人っちゅうのは
姓名は楽戯、字は手然。

あの“大絡繰り師”や。

けどな、“倒す”言うても“武力”でやないで？
あの方に“挑戦”するんや言わんでも判るやろ？

そう、“絡繰り”勝負しか有らへんわなっ！

ちゅう訳やから頑張りや。

と、最後は投げ遣りな終わり方をしている。

何と言っか…

あまりにも自分“らしい”熱の沸冷に少し凹む。

「……うん、アレやね
もっかい読み返しとこ…」

勿論、自画自賛の所を。

そして、気分を盛り上げて頑張ろう
そう自分を励ます。

そんな感じの真桜だが…

彼女だけ先行した理由には“作業時間”と“遭遇率”が配慮されて
いる。

楽手然は“大絡繰り師”と名を知られているが…
同時に“放浪者”としても非常に有名だった。

作品自体は稀少とは言え、市場に出回っている。
だが、製作者本人に出逢う事は極めて稀…

故に、華琳は真桜の内容を知ると直ぐに動いた。

勿論、他の娘の“試練”に関しても同様だが。

そして、楽手然の居場所の報告が入ったのが…

“天遣想祈祭”の四日目の朝の事だった。

真桜は即座に準備を整え、陳留を発った。

楽手然の居る許昌へ向け。

「せやけど“びんご大会”は参加したかったわあ…」

“隊長”が皆で楽しめると発案した企画で…

縦横各五つ、合計二十五の数字が書かれた木札を予め皆に配っておく。

そして、一から三十までの数字が書かれた球を司会が引いて発表し…

縦・横・斜めの何れかにて数字が揃ったら“びんご”になる。

“びんご”になったら声を上げて特設の舞台に向かい木札を確認される。

木札の“びんご”が成立と認定されたら、引き替えに用意された豪華な賞品から一点を選び貰える仕組み。

自分の木札は風に預けた。
後はもう祈るのみ。

「ホンマ、頼むでえ…」

無駄に真摯に呟き
遙かな蒼天を見上げた。

許昌

陳留を発って二日目。
漸く到着した。

“荷”が無ければ半日程で着けるのだが…
それが重要なので仕方無い事ではあった。

「さて、とつとあの人を見付けんとなあ…」

愚図愚図して発たれたら、“大将”に“掘られ”ても文句を言えない。

「ウチの身体は

“隊長”だけのもんやで」

思わず声に出てしまう。

だが、直ぐに羞恥から顔に熱が集まる。
自分で言っというて赤顔していれば言い訳も無い。

……う……あ……

などと考えていると、耳に遠くの喧騒が届く。

周囲を見回すが…
取り立てる程の“違和感”は見当たらない。

……ひゃ……ああ……

しかし、声は確かにする。

「……何やの？」

一体何処から

右手に“螺旋槍”を構えて再度視界を巡らす。

前、右、左、下、後ろ

「ホンなら
」

勢い良く見上げた蒼天。

其処に、小さな黒い染みが落ちている。

染みは急速に広がり

「
上？、つてえっ！？
うえええええーっ！！？？」

染みは“人影”になる。

「きゃあああああつ！！！！」

悲鳴を上げながら“落下”してきた“人影”に意識を奪われ、回避

が遅れる。

結果

ドッ ゴオオオンッ！！！！

轟音が響く。

朦々と舞い上がる土煙。

何とか“螺旋槍”で受け、直撃は免れた。

「痛たたたっ…」

今の、一体何やったん？」

衝撃で飛ばされ打ち付けた後頭部と臀部を擦りながら立ち上がり…

状況を把握する為に情報を集める。

周囲には被害らしい被害は見当たらない。

自分が受けた事で周辺への余波は生まれなかった様で一安心する。

（これも“隊長”の教えの賜って事やるなあ…）

胸中で呟く。

まだ義勇軍の頃の自分なら受けずに“逃げる”所だ。

自分が特別な“力”を持ち“戦う”事が出来た。

ただ、自分の“力”は命を奪う“戦”しか出来ないと思っていた。

けど、自分が持つ“力”は心に“勇”を以て振るえば誰かを守る“優”に成ると“北郷隊”に入り“隊長”から教わった。

詭弁に聞こえる言葉。

甘い理想の様な台詞。

だが

“信念”と“覚悟”の意を“霸王”と“隊長”の姿を見て学んだ。

“力”と“志”が融け合い心中に“不屈”の“槍”が生まれ、宿った。

それは

今も、心に在り続ける。

少しばかり、感慨に浸っていた思考を戻す。

土煙は大分収まり、視界も戻ってきていた。

其処で、ふと気付く。
奇妙な“違和感”に。

(……何でや？
何で誰も騒いどらんの？)

こんな目立つ状況なのに、住民は誰も騒いでいない。

だが、気付いていない筈は無いのは向けられる視線で確信が持てる。
なら、どういう事が。

考えられるのは
住民は“見て見ぬ振り”をしているという事。

しかし、此処は何処だ？

許昌 “魏国”が一都。

“霸王”の国で“それ”は考えるだけ無駄。
となると

(…まさか“日常茶飯事”ucciゅう事なん？)

そう“前提条件”を置いて周囲を見直す。

住民に浮き足立つ様な所は見受けられない。
寧ろ、気にしていない。

皆一様に“慣れた”感じを滲ませている。

「…あいたたっ…
また失敗しちゃったあ…」

土煙が晴れ、地面に座った人影から声が発せられた。

(いや、“また”って…)

胸中でツッコミながら側に近寄る。

「アンタ、大丈夫やった？
怪我とかしとらん？」

露になった姿に驚く。

背丈は風や桂花、朱里達と対して変わらない位。

薄緑色の髪は一つに纏めて思春の様に御団子を作っている。

焦げ茶色の大きな瞳をした少女が此方を見詰める。

「あ、はい、大丈夫

こう見えても頑丈に出来てますから」

そう言つて右腕を曲げると“むんっ！”と、気合いを入れて“力瘤”を作る。

「おおーっ！　　つてえ、全然出来てへんやんっ！」

反射的にツツコミを入れてしまった。

「……………」

大きな目を更に見開き呆然とする少女。

と、その双眸から涙が溢れ出す。

「　　えええっ！？」

あまりに予期せぬ事に驚き狼狽えてしまふ。

（泣かせたんっ!?

ウチがこの娘ん事泣かせてもおたんかつ!?

ツッコんだだけやのにっ!?

何でやねんっ!?

理不尽過ぎるやろーっ!?)

罪悪感、責任感、芸人魂、無情さ、理不尽さ…

あと、“隊長”への同情と自分の中で、色々な感情が交錯する。

「あ、すみません

嬉しかったので、つい…」

「嬉し涙かいつ!?

紛らわしいわっ!」

また、反射的にツッコミ…

“ やつてもうたあ…”と、その場で両手・両膝を着き頂垂れて後悔した。

此処が許昌

魏国の主要都の表通りだと忘れての行動。

一人では、退くに退けない状況に今更ながら後悔。

(……やっぱ、ノリ任せはアカンなあ……)

反省しながら、事態にどう“オチ”を着けるか悩む。

「あ、あの…大丈夫？」

恐る恐る話し掛ける少女。

正に“天佑”だと思った。

「ええねん…」

ウチの事は放つといて…」

態とらしく、自棄になって拗ねる様な態度を見せる。

普通なら見逃せる訳がない状況を此方で整えた。

“策士・李曼成やね”と脳内で自画自賛。

何故か、“はわわ軍師”が拗ねて、怒っている様子が脳裏を過った
が
気にしない。

「あ…はい、判りました」

所が、当の少女はあっさり放置を決め、気配が離れて行くのを感じる。

「いや、少しは構って　って、何やっとなるん？」

慌てて顔を上げると…

少女は土煙の中心地だった辺りに散らばる“何か”の“残骸”を屈んで拾い集めていた。

「片付けと回収ですが？」

少女は“それが何か？”と首を傾げている。

まるで“遊んだ後は”的な当然の事のように。

「いや、そうやのうて…

“それ”は何なん？

何や…“鳥の羽”みたいな形しとるけど…」

そう言いながら少女の隣に屈んで“残骸”を見る。

粉々なので全容は微妙だが“想像”するには十分。

脳内で組み上がるのは

「……空を飛ぶ　翼？」

「　っ!？」

つい、考えが溢れた。

少女は何か驚いているが、真桜は気付かない。

ただ、少しだけ…

自分の言葉の“違和感”が拭えないでいる。

（何かちやうねんなあ…）

何が違うのだろうか？、と悩んでいると

「これは“滑空翼”です」

少女から“それ”の名前が告げられる。

「…………滑空…………あつ！」

空を“飛ぶ”翼やのうて、空を“滑る”翼なんか成る程なあ…

せやから妙な“違和感”が有ったんやね…」

自分の感じた“違和感”の正体が判り納得する。

“飛ぶ”ではなく“滑る”なら“構造的に”無理無く説明が付く。

一人で頷いていると少女は徐に立ち上がる。

「私は楽戯、字は手然…

貴女は一体何者ですか？」

眼前の少女の放った言葉に今度は真桜の方が驚く。

「楽手然て…“あの”？」

「えつと…」

“放浪楽”や“酔狂楽”と呼ばれる“楽手然”です」

少女は苦笑しながら答え、此方を見詰めている。

深呼吸し、思考と気持ちを落ち着かせると…
少女を真っ直ぐに見返す。

「ウチは李典、字は曼成
“大絡繰り師” 楽手然殿に“絡繰り勝負”を挑む為に此処へ来た者
です」

先走りそんな激情を抑え、静かに宣戦布告する。

「李曼成……確か曹孟徳の御抱え“絡繰り師”……」

少女は“値踏み”する様に此方を観察する。

いきなり勝負を仕掛けたり“受けて貰える？”なんて訊く様な無粋な真似はせず彼女の“返答”を待つ。

「……うん、良いよ」

「……ホンマです？」

叫びそうになるのを堪え、冷静に確認する。

「ホンマ、ホンマっ」

彼女が笑顔で肯定した事で一気に緊張が解ける。

「ありがとうございます

楽手然殿」

「
繰主くりす」

「へ？」

目を瞬かせ呆然とする中、彼女は右手を伸ばし胸へと触れてくる。

「私の真名は繰主

貴女は私と同じ根っからの“絡繰り師”…

だから、真名で呼んで

あと、敬語も要らない」

ドキッ！…と彼女の触れる胸が高鳴る。

尊敬する“師”に認められ真名を預けられる
これ程、光栄な事は無い。

「…ウチの真名は真桜や

手加減せえへんで、繰主」

彼女の手を右手で掴み取りしっかりと握り返す。

「ふふつ、勿論

真桜こそ舐めてたら痛い目見るからな？」

繰主は楽しそうに無邪気な笑みを浮かべた。

「ほんで

何処で勝負するん？

街中は流石にアカンやろ？

やっぱ街の外なん？」

手を放し、周囲を見回して繰主に訪ねる。

「その前に聞くけど…

勝負内容は“絡繰り人形”でいいんだね？」

「そんなん当然やろっ！

“楽手然”言うたら何より“絡繰り人形師” っちゅうのが“絡繰り師”としての常識なんやからなっ！

それ以外の腕前もスゴいて聞いてるけど…

一応、ウチも“絡繰り師”の端くれやっ！

それに…

相手の土俵で挑むうちゅうのが礼儀やしな」

怯む事も、自惚れる事も、躍起になる事も無く…

相手を尊重し、敬意を払い全力を尽くす。

それは“あの乱世”を戦い生き抜いて“学んだ”事。

相手に対し欠かしては

忘れてはならない

“戦う者”の姿勢。

繰主は意外そうに目を丸くしていたが…

嬉しそうに目を細める。

「…ふふっ…うん

最高だよ、真桜っ
」

繰主の言葉もいつの間にか砕けた喋り方に変わった。

きつと、これも認められた証拠なんだろう。

「街の東側から外に出て、山の方に少し行くと野原が有るから其処

でやろっ
」

「了解や
」

「じゃ、私は“用意”して行くから先に行ってね」

そう言い残して繰主は踵を返し“残骸”を抱き抱えて走り去った。

「…………アレって結構な量有らへんかった？」

独り疑問を呟きながら…

季衣や流琉と“同種”か、と頬を引き攣らす。

「　　っと、呆けつとしてたらアカンっ！
ウチも準備せなっ！」

我に返り、持ってきていた“荷”を積んだ荷車を引き言われた場所
へ向かう。

許昌は魏国の主要都らしく賑わっている。

但し、表通りを中心とした“商業”のみを指して言う“賑わい”ではない。

老若男女を問わず、笑顔で生活している
それが、“魏”に於いての“賑わい”である。

まあ、それを“当然”だと思っている事自体が…
“魏の将”である証。

街を東側へと向かいながら歩いて見れば“警備隊”の姿を見付けた。

「あ　李典様っ！」

声を掛けて来たのは以前、陳留の警備隊
つまりは“北郷隊”に所属していた男性。

報告は受けているが…
直に元気な姿を見て安心したのが素直な感想。

三國統一前

赤壁の少し前に魏の各地へ向けて展開した…

治安改善及び警備体制法の拡大計画の第一段階として此処　許昌
へ赴任した。

連合結成の少し前に加入し自分が訓練を受け持った事も有ってよく
覚えている。

警備隊の中でも“隊長”が総責任者に就いた頃からの古株が居るに

も関わらず、“隊長”の選出には自分も驚いたが…
結果から見れば“拔擢”は大正解である。

第二次以降の“拔擢者”も確かな成果を見せている。

古参の者は“指導者”には向いていても…

“共有者”には向かない。

ある程度の経験値を持ち、“未完成”な者だからこそ“共に、築き上げる”事が出来る。

“隊長”がそうだった様に大切なのは

“同じ未来”を想い描き、手を取り合う事だから。

そして、“隊長”の蒔いた“種”は魏の各地へ広がり芽吹き始めている。

“笑顔”という花を咲かせ育み守る為に。

街を出て、少し山の方へと進んだ所に目的地と思しき野原が広がっていた。

ざっと周囲を見回し地形を頭の中に入れる。

“戦”を知るが故の習慣に思わず苦笑が溢れた。

思考を切り替え荷車を解き“荷”を下ろす。

“自信作”と言っても過言ではない出来。

しかし、不安は有る。

何しろ、相手は繰主…

あの“絡繰り夏侯惇將軍”を世に送り出した鬼才。

彼女の“模倣”が

自分の“業”へと至れるかどうか

“昇華”の時

「やつ、待った？」

格好付けていた所へ陽気に声を掛けられて、気持ち若干、盛り下がる。

が、直ぐ様、気合いを入れ直す。

「…いんや、さっき着いたばっかや」

そう言いながら振り向くと繰主が立っている。

「なら、良かった
さっ、始めよう」

そう言うと、繰主は背後に有った荷車へ向かう。

「そうそう、真桜

正確に訊くの忘れてたけどこの勝負

“自動”で良いんだね？」

「　　っ！」

その一言に顔が強張る。

どう反応していいのか困り呆然としていると

繰主はクスッ…と笑う。

「さつき持ってた“槍”に“氣”を利用する絡繰りが仕込んで有ったでしょ？」

だから、貴女は“此处”へ辿り着いてる　　違う？」

自信満々に訊ねる繰主。

その表情は見覚えが有る。

容姿は全然違うが…

醸し出す雰囲気と
身に纏う存在感は

“霸王”の“それ”に酷似している。

(……ああ、“大将”でも“こう”言うやろなあ……)

相手を揺さぶり
その真価を問う。

“才有る者”を目の前に、未だ見ぬ“輝き”へ想いを馳せ、心を奮
わせる。

(けどまあ……)

ウチかて伊達に“霸王”の将はしてへん
こんな 慣れとるで)

自然と口元が綻ぶ。

気が触れた訳でもなければ余裕の笑みでもない。

ただ、楽しくて……
ただ、嬉しくて……

心が躍っている。

「……違わへんよ
ウチが挑むんは

この“自動絡繰り人形”の勝負で合ってるでっ！」

そつ答え、“荷”に被せた布を右手で掴み
臆する事無く繰主を見る。

「これがウチの

李典式・自動絡繰り人形の“自信作”

銘はかずさ一桜やつ！」

声も高らかに

右手を引いて、覆っていた布を取り払った。

隣には彼女自身に良く似た姿の“人形”が有る。

“違い”と言えば…

髪の色が“焦げ茶色”で、着ている服は“白”を基調としている事
だろう。

「へえー…」

繰主は“一桜”を見詰め、僅かに目を見開く。

其処に垣間見えた感情は、“期待以上ね”という種の良い意味での驚き。

そして、繰主も傍らに有る荷車を覆う布に手を掛けて楽しそうな笑顔を向ける。

「真桜、紹介する
我が助手にして傑作
名を魅繰みくりと言う」

バサッ！、と宙を舞う布。

露になったのは
黒髪を靡かせ、威風堂々と佇む赤を基調とした衣装に身を包んだ女性
性の姿。

“見覚え”の有る 否、それは“本人”と見間違う程の精巧な出来映え。

「…しゅ、春蘭様…」

思わず、彼女の名を呟く。

“魅繰”と呼ばれた人形は春蘭に酷似していた。

「真桜、違うよ

魅繰の原型は亡き友…

尤も、彼女が 惇將軍が似ているのは当然
我が友の“娘”なんだし」

「へ？」

さらっと言われた爆弾発言など気にもしない繰主。

だが、此方はそう簡単にはいかない。

頭の中が混乱する。

（春蘭様が絡繰りで…

そのお母さんも絡繰り って、ちゃうちやうっ！

繰主の死んだ友が春蘭様にそっくりで、それは母親似の春蘭様で
）

頭を抱え身悶える。

だが、次の瞬間

「真桜」

「っ！？」

静かに繰主が名を呼ぶ。

同時に　叩き付けられた圧倒的な“闘気”に思考が真っ白に戻され：

瞬時に繰主で塗り潰され、身体は反射的に身構えた。

その様子を見て繰主は闘気を納める。

「考え事は後で、ね？

今は　“私達”を見て」

“勝負に集中しなさい”と繰主の眼差しが語る。

一つ、大きく深呼吸。

余計な雑念を吐き出す。

（さあ　集中しいつ！）

キッ！、と繰主を見据え、“一桜”を起動させる。

「ほな　行くでえっ！」

声と共に“一桜”が駆け、“魅繰”へと迫る。

「行け、魅繰」

繰主の静かな言葉に応え、“魅繰”は一步前が出る。

“一桜”の振るった右手を“魅繰”は難無く受け止めそのまま腕を掴み振り回し始める。

“一桜”は左手で“魅繰”の右腕を掴み強引に身体を引き寄せ、両足で“魅繰”の身体を蹴り飛ばす。

一端離れるかと思われたが互いに掴み合ったまま手を放さず睨み合った。

武将達の動きに比べれば、二体の動きは緩慢に映るが常人の域で考えれば十分に凄いと言える。

膠着は長くは続かない。

“魅繰”はクツ…と肘と肩を使い力を往なす。

体勢の崩れた“一桜”だが掴まれたままの手を放さず右足で地面を蹴って飛ぶ。

“魅繰”の頭上を飛び越え着地に合わせ、膝を折り、勢いと体重を利用し

“魅繰”を引っかく。

“一桜”より体格の大きい“魅繰”が宙を舞う。

綺麗に投げ飛ばされ

ドドオオーンツ！と轟音を響かせ、地面を揺らした。

舞い上がる土煙。

それを風が吹き払う。

晴れた視界の中

繰主の傍らに事も無さげに佇む“魅繰”の姿。

だが、先程とは違う。

“余計な物”に目を見開き“一桜”を見遣る。

“一桜”の右腕は肩先から無くなっており…

“魅繰”の右手に有る。

「此処までだね」

繰主が“終了”を告げる。

「ま、まだやつ！
まだ　　っ！？」

慌てて“続行”を訴えるが唇を繰主の指先が塞ぐ。
一瞬で間合いを取られた。

「真桜、勘違いしない
確かに貴女の技術は高い
でも、“源氣回路”を使い熟すにはまだ足りない
だから、時間をあげる
期間は　　うん、十日
その間、私の元で学び業を盗んでみせなさい
そして、改めて“決着”を着けましょう」

繰主は穏やかに微笑む。

それを見て理解する。
最初から　　この一戦すら彼女にとっては“試し”に過ぎなかった
のだと。

そして、自分は“合格”を貰えたのだと。

「……了解や、“師匠”
宜しゅう頼んます」

姿勢を正しゆつくりと一礼する。

「うん、楽しみにしてる
それじゃ、取り敢えず私の工房に行こっか」

繰主は笑顔で承諾した。

真桜は繰主に案内され：

一路、彼女の工房へ向かい“修行”する事となった。

第四話 真桜の試練（後書き）

次回更新時に消えます。

御待たせしました！

中々、纏まらなくて時間が掛かりました（-_-;）

各“試練”は2〜3話での構成を予定してます

また真桜の試練終了後には閑話として“ビンゴ大会”を予定してます

“見てみたい”との反応の有無で量を変えようかと

有れば5 p以上

無ければ3 p程かと

ご意見・ご感想を
御待ちしてます。

それでは、また（^ - ^）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2435p/>

胡蝶冀譚 想依儷輝

2011年6月18日08時34分発行